

那須野の大地

作・広島友好

○場割り

第一幕

プロローグ……昭和初め（四〇五年）・烏が森、大丸製糸工場盆踊り大会

（紗幕……明治十七年秋・那須野が原へ行く峠）

- 1 ……明治十七年秋・りんの家
- 2 ……同・那須野が原、力役作業
- 3 ……同・（那須開墾社杉林）・りんの家

第二幕

- 4 ……明治十七年冬（年の暮れ）・西岩崎取入口隧道工事
- 5 ……明治十八年春・りんの家
- 6 ……明治十八年九月（通水式前日）・りんの家
- 7 ……明治十八年九月十五日・那須疏水通水式

第三幕

- 8 ……明治二二年秋・りんの家
 - 9 ……明治二三年春・りんの家
 - 10 ……同9場
- エピソード……プロローグに同じ

○登場人物

鶴見りん……女の子

……娘

……大人（りん婆）

りんの父（鶴見）

りんの母（みつ）

タケ（りんの弟）……子ども

……少年

トメ（りんの末弟）……子ども

……（少年）

りんの祖母（とよ）

那須開墾社社員（権藤）

和尚

うめ（りんの友達）……女の子

……娘

うめの母（いね）

うめの父（国吉）

ぎん（うめの友達）

さくら（うめの友達）

借金取り

旧村の男の子……男子一

……男子二（一の弟）

……男子三

茂吉（駒井）……男の子

……青年

喜作……男の子

……青年

茂吉の弟妹達……せつ

……みね

……太吉

現場監督

隧道工事の親方（沼尾）

若い達

通水式司会者

山県有朋（声）

その婦人

女の子

印南丈作（声）

巡視人あ

同い

金毛九尾の狐

りんの孫娘

土方達

移住人あ・国吉

……い・駒井

……う・梶川

……え他多数

……女い・駒井

……女う・梶川

他多数

喜衛門（語り・乞食）

第一幕

プロローグ

盆踊りのお囃子の音が聞こえてくる。
幕が上がると、提灯に飾られた櫓の回りを人々が踊っている。櫓に掲げられた看板には「大丸製糸工場盆踊り大会」と書かれている。

(時は昭和の初め、所は烏が森)

「種蒔きうた」

水なし水のこの土地に

汗と涙がしみてきて ホレ

種さ蒔いては 日が暮れる

石から石のこの土地に

汗と涙がしみてきて ホレ

肥やし撒いては 月が出る

風から風のこの土地で

汗も涙も涸れ果てて ホレ

土を耕し 日が昇る

踊りの輪の中から、鶴見りん(大人)が一人離れ出てくる。烏が森の丘の上から那須野が原の景色を眺める。
トリんの孫娘が踊りの輪から駆けてきて、

りんの孫 ばあちゃん！ 踊らねえのか。

りん婆 一休みだ。ばば抜きで踊ってこい。

孫娘、再び踊りの輪に加わる。

男(喜衛門)、来る。

喜衛門 ええ眺めじゃのう。那須野の山が近う見える。

りん婆 あんた、生きとったんか。

喜衛門 よう似とる。お孫さんか。

りん婆 (頷いて) 製糸工場の女工だんべ。おらたちもお蚕さんやり始めてようやくと息がつけるようになった。

喜衛門 (笑みを浮かべ) いろいろあつたからな。

りん婆 けんど、田つくる夢あきらめたわけじゃねえ。おらの

喜衛門

目の黒いうちは無理でも——
——いつかこの那須野が原を水と緑の大地にして見せる、だべ。

りん婆

ああ。

喜衛門

(笑いながら、去る)

りん、そつと涙を拭く。

ト踊りの輪の中から少女たち(女の子と娘)が駆けてくる。

女の子

りんちゃーん!

娘

りんちゃーん!

りん婆

(はつとする)

女の子

泣いてるべ。

りん婆

え……?

娘

泣いてるだんべ。

りん婆

何だ?

女の子

もう泣かねえと約束したのに……、よく泣いたべ。

娘

泣いて泣いて、疏水の水になったんだべなあ。(少女たち、けらけら笑う)

りん婆

誰だ、おめえたち?

女の子

わからねえのか。

娘

わからねえのか。

りん婆

わからねえ。

女の子

おらはおめえだ。

娘

おめえはおらだ。

りん婆

おらがおめえで、おめえがおらか。

女の子

お話してくれ、おらがどうなったか。

娘

お話してくれ、おめえがどうなったか。

りん婆

おらがどうしたか、おめえがどうなったか。

女の子

さあ。

娘

さあ。

りん婆

だども——

女の子

(突然)とうちゃん! かあちゃん!

りん婆

とうちゃん……! かあちゃん……!

娘

タケ! トメ! ばあちゃん!

りん婆

タケ……! トメ……! ばあちゃん……!

少女たち(りん)、遙か遠くを見る。

風が出てくる。紗幕の向こうに大八車を引いたりん一

家の姿が見える。りん、りんの父、母、弟のタケとトメ、祖母。時は明治十七年の秋。今まさに那須野へ行く峠を越えようとしている。夕日が美しい。(少女たちとは紗幕の向こうとこちらとで台詞のやり取りをする)

女の子　とうちゃん。すんげえ原っぱが広がってる。

娘　あそこが那須野じゃねえか。

父　(不安げに) うん、きつとそうだ。

祖母　南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……

りん婆　……そうだ。おらが那須野にやって来たのは明治の十七年、疏水のできる一年前の夕日のきれいな秋の日だった。

りん　かあちゃん、ここならまだ引き返せるぞ。

母　そうだな。

父　馬鹿言うな。引き返すたって、住むところはもうねえんだから。第一戻る銭がねえ。

母　何威張ってたんだ。みんな博打ですつちまってる。

父　十日も大八車引いて山道歩くこっちの身にもなってる。たまの旅籠でちよつと気晴らしただけだろ。

母　那須野で今から何があるかわからねえのに。

父　心配いらねえ。行けば何とかなることになってんだ。

タケ　とうちゃん、また餅が食いてえよう。

トメ　餅食いてえよう。

祖母　なあ、やっぱ越後に戻るべ。

父　何言ってる。見てみる。ここにおらたちの土地があるんだ。人の田んぼ耕して泣くこともなくなるんだ。

祖母　この通り。もうおめえのこと責めたりしねえから。

父　……

祖母　なあ、帰って赤い茶碗でままが食いてえよ。

父　……よし、わかった。

母　とうちゃん。

父　ええ。もう何も言うな。乗れ、ばあちゃん。

祖母　ええのか。ええのか。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……(大八車に乗る) ええ婿持った。

父　よくつかまってる。(母に目配せし) 行くぞ!

父、大八車を引いて峠を一気に駆け下りる。

女の子

とうちゃん!

娘　　とうちゃん！
りん婆　そっちは那須野の方だ！
祖母　何すんだ、馬鹿たれが！　越後が遠くなる！
父　　おらたちにはもう帰る道はねえ。でこぼこ道でも泥道でも、転んでも滑っても前に進むしかねえんだ！
タケ・トメ　とうちゃん、待ってくれ！（続いて駆け下りる）
母　　とうちゃん！（タケとトメに続く）
りん　　とうちゃん！　かあちゃん！　タケ！　トメ！　ばあちゃん！
りん婆　とうちゃん！　かあちゃん！　タケ！　トメ！　ばあちゃん！

テーマ音楽。タイトル。「那須野の大地」

語り　その昔、金毛九尾の狐が住むと言われた那須野が原は明治の時代に入っても枯草しか生えてない荒れた寂しい草野原であった。

冷たい刃のような空つ風が遮るものない枯野を吹き抜け、野火にしろうじて焼け残った栗や榎の木がそのやせた幹を天に凍えさせた。一万町歩の土地に一条の川の流れもなく、水なき所に住む者とてこれまたなく、人はここを秣場として利用するだけだった。

まさにここは狐の寝床であった。この那須野の大地に多くの名もなき人たちの開拓の鍬が入るまでは――。
（語りは喜衛門が行う）

1

父　　何だと、約束が違うだろ。

トそこは那須野が原。夕暮れ。りん一家が萱を集め堀立小屋を作っている。荷の解かれた大人車が小屋のそばに置かれている。そこに那須開墾社の社員が来ている。

社員　ないものはないんだ。

父　　ここに来たら支度金を貸してもらえると聞いて来たんだ。

社員　またか。

父　　土地がただでもらえて、おまけに銭も貸してもらえる

と。だから、おらたち何もかんも売っ払ってやって来たんだ。

社員 誰に聞いた、その話？

父 那須開墾社の柏村ちゅうやつだ。

社員 あの男はうちの開墾社とは何も関係ない。

母 ええ！

社員 あれはうまいこと言って、おまえたちみたいな食いつめて国を出るしかなかった者から斡旋料と称して銭取って儲けとる男なんだ。

父 じゃ、騙されたのか。

社員 まあ、あながち全部が全部うそとも言えんからわしらも困っておるんだが。

母 おらたちにどうしろと言うんだ。何の事情もねえ者ばかりがここにやって来るんじゃないやなかう。

社員 あのな、この那須野が原の開拓は、自分で小屋掛けして最低一ケ年は暮らしを支えていくぐらの銭がなければ、到底やっていけるものではないんだ。おまえんとこのヨコシ村役場にも開墾社からの手紙が行つとるはずだが。

父 知らねえ、聞いてねえ。

社員 とにかく、働くしかないの。ええか。ここはただで土地がもらえるところじゃない。

父 そんな（ことは）……

社員 この那須野が原で真面目に働く者に土地を貸し与えるんだ。自分に分け与えられた土地を責任持つて開墾し、そうして十五年の後に自分のものとなるんだ。

父 十五年！

社員 ただし毎月五日、力役人夫として賃金無しで開墾社の土地の開墾や、作物の植え付けなどの仕事をしなければならん。わかつたな。それと――

父 まだあるのか。

社員 こんな建て方では風で飛ばされてしまうぞ。

父 風で飛ばされる。ハッ、大風の季節でもあるまいし。

社員 まあ、ええ。今にわかる。（去ろうとする）

母 水は、どうしたらええんだ？

社員 汲みに行く。

母 井戸はどこに？

社員 ない。

父 ない？

社員 この先に川がある。水はそこに汲みに行く。もつとも

父・母
社員

片道一里はあるがの。
一里！
お、それから、あすは朝から力役じゃ。遅れずに来るんじゃぞ。ええな。(去る)

ト先程から移住人の子どもたち(うめ・ぎん・さくら・茂吉)が来ていた。皆はりんと同じ年ぐらい。うめは手にお手玉を持っている。うめたちは小屋裏の萱の陰に隠れている。

祖母

とにかくあしたからどうするかだ。

父

金もねえ、米もねえ、おまけに水もねえ。

母

種籾食うわけにもいかねえし。

うめの声

おばちゃん。炭俵編めばええんだ。

子ども達

そうだ、それがええ、それがええ。

りん

誰だべ？

うめの声

おらたちか。

りん

そうだ。

うめの声

おらたちは、——そう、この那須野が原に住む金毛丸尾の狐だべ。

ト小屋裏の萱の中から狐の尻尾のような枯れ笹が出る。

タケ・トメ

ひえ！(祖母に飛びつく)

祖母

南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……

ト次に狐の顔を作った子どもたちの手が出てきて愛くるしく動き、あいさつをする。トけるけると笑い声。

りん

おめえたち誰だ？

うめ

(萱の中から顔を出し)おら、うめだ。

ぎん

おら、ぎん。

さくら

おら、さくら。

茂吉

おらは茂吉だ。

うめ

茂吉はさしずめ那須野が原のイタチだな。

茂吉

(前足で頭を搔く真似をする)

タケ

何だ、子どもじゃねえか。

母

どこの子だ？

うめ

ここの隣りの子だ。お隣りさんができてうれしくてや
つて来たんだ。(他の子どもたちに)な。

子ども達 うん、そうだんべ。
りん おら、りん。
うめ おら、おめえのこと知ってるんだ。
りん え？
うめ 大八車押しながら泣いてたべ。
りん
うめ ー
ここの山も何もねえ原っぱだから一里先でも何してる
か見えるんだ。
りん おらー泣いてなんかいねえ。
うめ そうかー。仲よくするべ。(手で狐を作り)よろしく
な。
子ども達 よろしくな。
りん うん。こっちは弟のタケ造とトメ造だ。
茂吉 びっくりしたべ。
タケ・トメ うんー。
父 ところで、何だ、その炭俵編むって？
うめ 炭俵編んで大田原の市場に持ってくんた。
ぎん ここは萱ならいっぺえあつて炭俵編むのには困んねえ
しー
茂吉 萱なら只だしー
さくら 市場に持ってけばすぐ銭になる。
うめ おらのかあちゃんは一日で二十枚編んでるべ。
母 炭俵……。
父 (怒気を含んで) ハッ、それがいくらになるんだ？
うめ いくらにもなるってーなあ。
茂吉 いくらにもなんねえよ。
父 (母に) おい、あれ出せ。どこやった？(荷を探し始
める)
母 何だ、とうちゃん？
父 あれだ。帰りの路銀ぐらいにはなるだろ。
母 あんた、まさかー
父 あれ売って、帰るんだ越後に。
母 おら売らねえぞ。あれは死んだじいちゃんが買うてく
れた大事なもんだ。
父 くそ！(荷物をぶちまける) やめだ、やめだ！こ
んなところもう半日だつていらねえ。
母 いらねえつたつて、どうするんだ。
父 あの野郎見つけ出して斡旋料取り戻すんだ。
母 帰るならとうちゃん一人で帰れ。おらもうここを動か
ねえ。いいか、とうちゃん。あん男も馬鹿じゃねえ。

もうとつくの昔にどっか逃げてるわ。

父 くそ！（立てかけの家を壊そうとする）

りん どうちやん！ 何するんだ！ やめてくれ！

母 あんた！

タケ・トメ どうちやん！ どうちやん！

父 うるせえ！ くそ！ くそ！（なおも壊そうとする）

祖母 やれ、やれ！ 気の済むまでやればええ。

りん ばあちゃん！

祖母 地主に負けねえような白壁の家建ててやると大法螺吹

いておらたちをここへ連れて来たんだ。引っ込みがつかねえんだ。

父 何だと！

祖母 一家支える柱となる男が柱もねえ萱ばかりの小屋に耐

えられねえんだわ。（笑う）

父 ばあちゃん！ あ——！

トいきなり祖母、父の頬を叩く。父、祖母をじっと見る。

祖母 あの峠でおめえおらに何てった（言った）。転んでも何しても前に進むしかねえと言ったでねえか。今のおらたちちよつと転んだだけだぞ。

父 （自分の頭を叩きながら）おら、馬鹿だ、馬鹿だ、馬鹿だ。

父、しやがみ込む。

とりん、突然——

りん （那須野が原に向かって）おーい！ おら、りんだ！

鶴見りんだ！ 越後の山ん中から来た女子だ！ よろ

しく頼むな——！

りん……？

何してる？

りん 那須野の大地にあいさつさしてるんだ。——とうちやん。ここには広い土地がある、越後の山ん中じゃ考えられねえような。ここ、いつかおらたちの土地になるんだな。

「思う存分自分の田つくりてえ」

タケ うん。じいちゃんの夢もここなら叶う。——そう言ったのはとうちやんだ。

母 あんた……。
父 ……。
うめ おばちゃん、どうする？ もう日が暮れるべ。
母 お願えるよ。
うめ うん。こつちだ。 (りん) またな。
女の子 さよなら、りんちゃん。

母、うめや他の女の子たちと共に去る。

祖母 よし。そうと決まったらもう一度萱取ってくるか。転
んでも、滑っても、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経
…… (去る)

りん (荷物の中から鍋釜を取ってタケに渡しながら) タケ。
水汲み行くぞ。

タケ うん。——でも、川はどつちだ？

茂吉 うん、おら、案内してやる。

りん、タケ、茂吉、去る。父、呆然と立っている。

トメ とうちゃん。なあ、とうちゃん。はらへったよお。 —

—あ、とうちゃん泣いてる。(父を見上げる)

父 (頬の涙を拭う)

「暗転」

2

語り 明治日本を導いた維新の三傑の一人、大久保利通こう
言っている。

「明治元年からの十年間の日本は、動乱と創業の時代
であった。これから先の十年は、内治をととのえ民産
を興す、すなわち建設の時代である」と。

内は士族の反乱と農民一揆に悩まされ、外は欧米列強
の圧力に苦しんでいた明治の初め、政府は「富国強兵」
「殖産興業」を一大スローガンに掲げ、新しい国造り
を強力に推し進めていこうとしていた。

この那須野が原の開拓も殖産興業政策の一つである。
開拓の夢に燃える印南丈作と矢板武らのつくる那須開
墾社は政府より三千四百町歩の土地を拝借し、開墾事
業の第一歩を踏み出していったのであった。

枯野原を移住人たちが開墾（力役作業）している。りんの父母も働いている。遠くでは馬に犁（すき）を引かせアラクオコシをしている。移住人たちは石ばかりの土地に悪戦苦闘中。いくつもの石塚（石蔵）ができています。（那須野原開墾ノ図参照）

移住人あ

くそ！ おおい、手伝うてくれ！ どうにもならん！

移住人あ（うめの父・国吉）が土中の石を起こそうとして手間取っている。二三人が近づいて、力を合わせて石を起こそうとする。

あ

やーれ！

い・う

そーれ！

あ

やーれ！

い・う

そーれ！

やつと石が起きる――

りん父

何とまあ！

あ おい、積んでくれや！

他の男たちが石を石塚へ持っていく積み上げる。うめの母、りんの母を伴ってやって来る。

うめ母

ようい、とうちゃん！

りん母

ちようどええ、おらとこのとうちゃんもいる。

うめ父

何だべ？

うめ母

ほれ、きのう話した、鶴見さだ。

りん母

よろしく頼みます。

父

（りん母に）誰だ？

りん母

国吉さだ。（狐の手をして）うめって子の――。

父

ああ。（軽く頭を下げる）

うめ父

どうも。

うめ母

わかんねえことあったら聞いてくれ。たいていのこと

うめ父

おら知ってつから。

うめ母

おめえのたいていは、たいてい当てになんねえじゃね

えか。

うめ母

いやだ！（うめ父の肩を叩く）何言ってるんだ、人前で！

父 (恥ずかしいのを笑ってごまかす)
それにしても、何でこんなに石ばかりなんだ？
うめ父 そりゃこの一帯川に押し流された土砂でできた所だからだ。

父 じゃ、このだだっ広え草っ原の下は皆石か。
うめ父 そうだっぺ。石の上にも三年って言葉があるけど、
うめ母 ここは石をのけても三年――

うめ父 石のけた次の日にはまた石が増えてるだんべ。
うめ母 できるのは石蔵ばかり――

い (突然) あー、しもうた！
うめ父 どうした？

い (鍬の柄が) いかれちまつてる――。

うめ父 おめえ唐鍬(トーグワ)持ってねえのかよ。こんな薄
い刃じゃ、石にかなわねえべ。

い ああ、おらもう打(ぶ)ってもらう銭ねえよ。
う おい、あれ――

ト皆の視線の先に乞食(喜衛門)がいる。

うめ母 またいるだんべ。

りん母 誰だ？

うめ母 乞食だよ。でも妙な乞食で、物乞いするわけでもねえ
し……

う (節つけて) どこから流れてきたのやら。

父 さっきの話だけんど、こんな石ばかりの所に田ができ
るんだか。

うめ父 何言ってる。田どころでねえ。畑にするのもこのやせ
土で肥やしも馬鹿になんねえ。

い やせ土もそうだが、問題は水だんべ。
父 水――。

い ここら一帯水がない。何たって、石ばかりで水のねえ
川があるぐれえだから。

うめ母 井戸だって相当深く掘らねえと水にぶち当たらねえし。
父 おらたちすぐにでも田つくる腹でいたのに……。

うめ父 そりやおらたちもだ。
父 十五年働いて、土地がおらたちのものになったとして、
肝心の水はどうなるんだ？

う 那珂川から引っ張るちゅう話だが、疏水つくって――
りん母 疏水――。

う もう随分前から取入口の隧道工事やっとなるわ。

うめ父

飲み水用の水路も北の方にあるにはあるが――

い父

じゃ、おらたち何して暮らしてくんだ。田もつくれねえ、畑もこのやせ土で――。おらたち一体――。

皆、黙ってしまう。

ト社員、来る。

社員

おうい、何さぼってんだ。話してねえで手動かせよ。この那須野の開拓は皆の力にかかってんだから。千里の道も一歩から。那須野の開拓も鍬の一入れからだ。わかったな。それと、馬の飼い葉切りと大根取りやりてえんだ、二人ほどこつちさ手伝ってくれ。

ちよつとええだか。

父 社員

何だべ？

父 社員

その、何だ、今みんなから、ここは水がなくて田もできねえって聞かされて、おら正直おったまげてるどころなんだ。それで、疏水のための隧道工事してるって話だけんど、いつ水はここまで来るんだ？

社員 父 社員

ええか。疏水を引くのは莫大な銭がいるんだ。とても開墾社の力だけでは無理な話なんだ。――ま、しかし心配するな。印南様や矢板様の働きかけもあり、隧道工事が成功すればお上は許しを出してくださる。そうすればすぐにでも疏水の工事は始められる。それはいつになるんだ？

(内心困って) 近いうちだ。

父 社員

近いうちって、一週間か、十日ぐれえか。

社員 父 社員

近いうちは、近いうちだ。(うるさがつて父を避け、他の二人に) よし、こつちさ来てくれ。他の者らはとりあえず昼飯にするだんべ。

うめ母

おら行く、おら行く。帰ったつてしょうがねえべ。

社員、うめの母と他一人連れて去る。他の移住人たちはばらばらと帰る。りんの父母は残る。うめの父も残り、竹筒から水を飲もうとするが数滴しか残っておらず、舌で舐めて「あーあ！」と大の字に寝てしまう。

りん父

母

(母に) こんなにひでえとこだとは思ってなかった。でも、疏水ができて水引ければ――(ト急に下腹に痛みが走る)

父 (気づかず) くそ……。

とトメが泣きながら駆けてくる。りん、その後を追うように来る。

トメ かあちゃん！ かあちゃん！（母にしがみつく）

母 どうした？ 泣いてちやわかんねえ。あれ、トメ、おめえ口から血が出るでねえか。

りん かあちゃん。（遅れてくる。息が荒い）

母 りん、どうしたんだ？

りん 殴られたんだ――

父 殴られた？

りん 村の者（もん）に――

母 村の者に？

りん 水汲み行ってる途中、おらがちよつと目離した際に、

母 タケが村の者とけんかして――。

りん どうしてまたけんかなんて？

父 （何か隠して）おら、知らねえ……。

りん タケはどうした？

父 捕まってる。

父 何？

りん 相手の子けがさせて、その子の家に捕まってる。あや

父 まりに来いって。子どものしたことは親の責任だ、頭

母 下げてあやまるまではタケは返せねえって。

父 くそ！

母 あんた、いいよ。おら行ってくる。あんたが行ったん

父 じゃまたけんかになっちまう。

母 うるせえ！（母を振りほどく。その拍子に母が倒れる）

父 うう。（下腹を押さえうずくまる）

母 かあちゃん、どうした？

母 大丈夫だ……（トまた立ち上がろうとするが、またう

母 ずくまってしまう）

母 かあちゃん。かあちゃん！

母 来るな、りん！ こっちさ来んでええ。（なおもうずく

母 まる）

りん かあちゃん……。

「暗転」

語り

困民（こんみん）、困る民と書いて困民と自らを呼ぶ百姓たちがいた。

疏水のできる一年前、明治十七年、世界的な恐慌と政府のデフレ政策による不況下で多くの者たちが苦しんでいた。特に関東の養蚕農家のそれは深刻であった。百姓たちが集団で高利貸を襲い貸金証書を焼き払うという事件も起きた。

苦しんだのは百姓ばかりではない。明治政府によって切り捨てられた下級の武士たちも同様だった。腰の刀を算盤に持ち替え慣れぬ商売に手を出し失敗する者や、何の技術も資産も持たず人夫や土方となり大都市の吹溜まりに流れ込む者も多々いた。果ては、身を持ち崩し囚人として北海道に送られ道路建設や石炭掘りの開拓の人柱にされる者もいた。世はまさに困民に溢れていた。

舞台は那須開墾社の杉林。夜。杉林に月影が差し込んでいる。

りんの祖母が籠を背負いやつて来る。柴など薪になる木を探している。

祖母

ねえなあ。燃やすもんがなければ飯が炊けねえ、寒さ凌（しの）げねえ。

ト牛が一頭、祖母に近づき「モウオ」と鳴く。

祖母

ひゃあ！ 何だ、迷い牛か。しっ。しっ。――あれ、てことは。えらく遠くまで来ちまっただな。（柴を見つけて）たちねのー、しわくちやばあが柴とって、しばくちやばあとなりになるかも、と。退散、退散。

ト見回りの巡視人が二人、カンテラを下げてやって来る。

巡視人あ

あ、いたべ！

巡視人い

そこで何してるんだ！

祖母

ひえ！（慌てて隠れる）南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經……

巡視人あ

おい、こら、そこにいるのはわかってんだ！

巡視人い おとなしく出てこい！

巡視人たち、祖母の前に迫ってくる。

祖母 (小声で) 南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……

ト巡視人たち、行き過ぎる。

巡視人あ 待て、こら！

牛 モウオ！

巡視人あ あ、行っちまっただんべ！

巡視人い 逃げ足の早え牛だ！

巡視人たち、牛を追いかけて去る。

祖母 ひやー、助かった。

ト杉の木陰に隠れていた老婆たちが一斉に立ち上がる。

老婆たち (皆同時に) 助かったー。

ト祖母と老婆たち、顔を見合わせ、

祖母 ひひひひひ…… (笑う)

老婆たち ひひひひひ…… (笑い合う)

暗転。

トけらけらと笑い声が聞こえてくる。舞台明るくなる。りんの家。うめとうめの母がりんの母の見舞いに来ている。うめはりんとタケとトメと遊んでいる。父は家の外で箆を敷き、慣れぬ手つきで炭俵を編んでいる。祖母は粗末な囲炉裏に薪をくべている。

うめ母 この薬飲んでじっとしてれば良くなるべ。

りん母 すまんねえ。ありがとう。(薬飲む)

うめ母 おらの国は富山だから薬だけはたくさん持って来た。

だもんで銭なくて何にも食う物がねえ時は菓ガリガリ食べてるべ。いや、本当。(自分で言っ自分で笑っている)

祖母 なあに、病気じゃねえんだから。元気になればまた何

人だつてできるわ。

父 ああ、くそ！（編むのがうまくいかず、炭俵編みを蹴飛ばす）まったくよお……（また編み始める）

うめ母 そんなで、あれからどうした？　とうちゃん、村さ頭下げに行ったのか。

りん母 ああ。随分荒れて帰って来たけど。何言われたんだか、一言もしゃべんねえ。変なところで意地っ張りなんだから……（思わず涙がこぼれる）

うめ おぼちゃん……。

うめ よいよい、ふさぎの虫に取りつかれちゃ駄目だつぺ。

りん そういう時は口ん中でプチつて言うんだ、プチつて。

うめ母 プチっ……？

りん そうだ。プチつて言って心ん中のふさぎの虫を殺しちゃうんだべ。爪で蚤殺すみたいに、プチっ、プチつて。

りん プチっ、プチっ……

りん プチっ、プチっ……

うめ母 うん、そうだ。身体が弱れば心が弱る。心が弱れば生きていくのが嫌になる。だからプチっ、プチつてふさぎの虫を殺しちゃうんだ。

父 へっ、プチっ、プチっ、ねえ……。 （小馬鹿にする）

りん母 そうだな。ふさぎの虫なんかに負けちゃいらねえ。

うめ母 そう、その元気だ。

りん母 あんたには本当に世話になつて。炭俵の編み方から何から。おまけに薬まで。 （トまた涙が……）

うめ母 また——。 プチっ、プチっだんべ。

りん母 ああ、プチっ、プチっだんべねえ。

タケ おらもプチプチするだ。

うめ母 タケ坊にも悩みがあるんだな。

女たち笑う。

うめ母 さ、帰つてもう一踏ん張りするべ。 でなきや、あした

食う米がねえと。 （自分で笑う） うめ、帰るべ。 ほんじ

や、ま。 （うめと共に去る）

りん母 ありがとな。

父 よう笑う女子だ。 ……ああ、くそ。 酒が飲みてえなあ。

トメ ああ、くそ、おはぎが食いてえなあ。

父 うるせえ！

暗転。

りん語り

とうちゃんは間もなく駄賃引き、ていう運搬の仕事を始めて日銭を稼ぐようになった。かあちゃんの編んだ炭俵を荷車に積んで関谷宿まで持って行き、そこで炭を詰めて、それ持って黒磯の間屋まで運んで行くんだ。道のりは長かったけれど、大田原に行くより稼ぎが多かったんだ。

その頃おらたち子ども間で流行ってた歌があった。その歌うたいながら水汲みに行ったもんだ。

歌声

「九尾のきつねのかぞえうた」
きつねのしつぽの かぞえうた
いちび にいびで 子どもをあやし
さんび よんびで 女子にばける
ごおび ろくびで 枯れ野をはしり
ななび はちびで 野火おこす
きゅうびそろえば 人ころす

歌をうたいながらりんとタケ、水汲みから戻ってくる。その後をトメもついて来る。タケ、ふらふらして足元が危ない。

りん タケ、もつたいねえ、水こぼすな。
タケ だつて――。もう駄目だ。(水桶を置き、へたり込む)
りん (トメの桶を覗いて) 水、半分になつてでねえか!
タケ ええ!
りん ふらふらすつからだ、この! (とタケを殴りつけようとすが、肩が痛みうづくまる)
タケ・トメ ねえちゃん!
りん 何でもねえ……。

とトメ、ふと道端に何か見つける。りんとタケに気づかれぬよう、素早く摘み取り口の中に入れるが、

トメ ペツ、ペツ。にげえー!
りん 何してんだ、おめえは?
タケ 草食つたんだ!

りんとタケ、ひとしきり笑う。トメも笑う。自然、一休みになっている。

茂吉の声 おーい！
タケ・トメ あ、茂吉あんちゃん。

茂吉が天秤棒に水桶を担いで来る。その後ろを茂吉の弟妹たちがぞろぞろとついて来る。

茂吉 何だ。一休みか。

りん (立ち上がり) ちがう。タケがへたばってただけだ。

茂吉 どれ、貸してみな。

茂吉、タケの水桶を自分の天秤棒に掛け、都合四つの水桶を軽々と担ぐ。

タケ・トメ ワア、すげえや。

弟妹達 すげえや、すげえや。

トそこに茂吉の行く手を遮るように旧村の男の子たちがやって来る。男子二は頭に派手な包帯をしている。

男子二 原方の者じゃなかんべか。水汲みか。ご苦労だな。

男子三 ご苦労だんべな。

茂吉 (りん) 村の者だべ。

タケ 何だ、おめえたち、また泣かされてえのか。

りん やめろ、タケ。

声 誰が泣かされるって？

ト男子一、来る。

男子二 (男子一に) あんちゃん、あいつだべ、おらをこんな目にあわしたのは。

男子一 おめえか。おらの弟をようかわいがってくれたなあ。
(指鳴らす)

タケ (りんの陰に隠れながら) おらたちを馬鹿にすつからだ。

男子一 原者さ原者と言って何が悪い。

男子二・三 そうだ、そうだ。

男子一 おぬしらわざわざおらん家(ち)の畑の前通って芋でも盗もうとしてたんじゃねえのか。

りん あれは近道しただけだ。

男子一 (お握りを懐から出し) おぬしらいつも何食ってんだ？

タケ
ひえか？ あわか？ それでもそばか？ 原のねえちやん、ひとつこの握り飯と替えてくれや。（三人笑う）
くそお！

タケ
かまうな、タケ。

男子一
そうじゃ、水汲みならおらんとこの井戸を使えばええ。何ぼでも使わせてやるぞ。

タケ
本当か。

男子一
本当だつぺ。（仲間に）なあ。ただし、水がほしけりや、萱の尻尾つけて犬の真似して吠えてみな。

男子二
三回回ってワンと鳴け。

男子三
ついでにチンチンしてみるだんべ。（三人笑う）
くそお！

タケ、三人組に挑みかかるが、あっさりやられる。

男子一
何だおぬしは。力が入ってねえでねえか。（三人笑う）

茂吉
よし、おらが。（三人組に挑みかかる）

弟妹達
あんちゃん、がんばれ！（繰り返し）

茂吉、てこずるが、三人をやつつける。男子二、泣く。

男子一
（男子二を叩く）馬鹿、泣くな！（ト男子二、もつと泣く）くそ！ こうしてやる！（りんたちの水桶を引つくり返す）

りん
ああ！（倒れた水桶を必死で拾って）何するんだ、おらたちの水を！

男子一
ええ気味だつぺ。

りん
ちくしょう！

りん、三人組に挑みかかる。

男子三人組は逃げ回りはやし立てる。

三人組
原者、原者、どこから来ただ、お国を捨ててやって来た。……

りん
こら！ 待て！ おらの水を、おらの水を！ 許さねえからな！（涙声になる）

トこの時、旧村の男の子喜作が現れる。男子三人組は気づかずに喜作にぶつかる。喜作、男子一を張り倒す。

男子一 何するべ！
喜作 また悪さしてるだんべ。
男子一 喜作か。
喜作 さあ、あやまれ。弱い者いじめして。
男子一 何も。こっちは親切に家の井戸を使わせてやろうとしてたんだべ。なあ。
男子二・三 そうだ、そうだ。
タケ うそだ！ おらたちの汲んできた水みんなこぼしてしまつたんだ。
喜作 こいつ！（殴りかかる真似をする）
男子一 へなちよこ喜作、覚えてろ。地主の倅でも、今度会つたら肥溜めに落としてやるからな。
喜作 （また殴りかかる真似をする）

三人組、逃げるように去る。去りながら「原のねえちやん、狐の子、金毛九尾の狐の子、怖えぞ、怖えぞ、へそ隠せ」等とはやす。

喜作 勘弁してくれな。
りん おめえがあやまることねえ。
喜作 そりゃ、そうだけんど……。
りん おめえ、名前は？
喜作 喜作。
りん おら、りん。
喜作 りん。いい名だな。
りん みんなそう言うべ。
喜作 （笑つて）そんなじゃな。（去る）
……。
（桶見て）ねえちゃん、どうする……。泣くな。その涙ももつたいねえ。（涙ぐみそうになる）くそ、腹さえへってなきや、あんなやつらに負けねえのに。
トメ 負けねえのに。
りん タケ。トメ。おら決めたぞ。決めたんだ――。
タケ 何を？ 何をさ？
りん ……。

トメ ト父が荷車を引いて帰ってくる。
とうちやんだ！（駆け寄る）

父 どうした、皆で集まって？

トメ あのな、とうちゃん――

りん トメ！（トメを黙らせる）

父 （倒れた水桶を見つけて）ん？ 空っぽでねえか。――りん。

りん 何でもねえ。（水桶を取って）行くぞ、タケ。

タケ おらもう動けねえよお。

りん 来い！（耳を引っ張る）

タケ イテ！ イテテテ――（引っ張られて行く）

父 りん！

りん 何でもねえ！（駆け去る）

トメ 何でもねえ。（続いて駆け去る）

茂吉 何でもねえよ、おじちゃん。（同じく駆け去る）

弟妹達 何でもねえ。何でもねえ。……（皆、次々と駆け去る）

末の弟 （最後に残って）何でもねえよ。（駆け去る）

父 何や知らんが――、無邪気でええな、子どもは。

父、那須野が原に一人立つ。

父 あ、月が出る。

ト月が出てくる。夜になる。

父、鍬を手に土地のアラクオコシを始める。

りん語り

その日は月がポーンと昇って明かりの冴えた夜だった。おらたちが水汲みから帰るともうとうに日は暮れていた。とうちゃんは月明かりの下、おらたちの土地を耕していた、十五年働いてようやくとおらたちのものになるという土地を。夜中に小便に起きたタケがいつまでも不思議がってた――

タケ とうちゃん、いつ寝てるんだ？

やがて朝になる。小鳥の囀りが聞こえてくる。つまり父は土を耕したまま朝を迎える。

母 とうちゃん、用意できたぞ！

母、荷車に炭俵を山盛りに積んで出てくる。

父 こんだけの炭俵運んで飯買っても、子どもらが食つち

まったらあしたの分は残んねえ。
きょうがしのげるんだから。
百姓が米買うなんて、おらつくづく情けねえ。
また愚痴だ。

母 父 母 父 母
（ト母の足に巻いてある手拭に気づいて）ん、どうした、その足？
鎌でぎっくりやったんだ、萱取ってる時に。でも、たいたことねえ。（無理して足を振ってみせる。が、本当は痛い）

ト祖母、来る。

祖母 父
ほお、待て、待て。持っつけ、草鞋。行って帰ったら一つはお釈迦だ。（父の腰に付けてやろうとする）

父 祖母 父 祖母
ええよ。（自分で付ける）ばあちゃんには土地残してやれねえな。越後に下ろしたばあちゃんの根っこ、引っこ抜くようにしてやって来たのに。
何も。ここはおらの土地だ。
ばあちゃん。

母 父 祖母 父 祖母
越後みてえに太え川があればなあ。
皮肉な話だ、前は暴れ水で畑食われて苦労したのに、ここは水なし川しかねえなんて。ほんによう。（溜め息）
ふさぎの虫は殺さねば、プチっ、プチっ、てな。
……

りんたち、起きて家から出てくる。

タケ 父
とうちちゃん、行くのか。

父 トメ
ああ。
町でまんじゅう買って来てな。

父
（答えられず）——じゃな。
父、家を離れた所で思わず大きな溜め息をついてしま
うが——

父
（思い直して）プチっ、プチっだんべ。（去る）

母、袖捲って——

母
さあ、踏ん張って炭俵編むだんべ。ばあちゃん、萱頼

りん
むな。りんたちはとうちゃんの続きだ。
わかってる。

母、家の中へ。祖母、籠を担いで去る。

りん
(タケとトメに) さあ、おらがアラクオコシすつから、

おめえたちは二人で邪魔な石どかせ。ええべな。

でもどうやってこんな固い土起こすんだべ？

いいか。(鍬を振るう) こうして、こうして、角切って、

掘り起こして、(苦勞して) くー、ええい、どっこいし

よ！ ハハ---

石、ひっくり返った！

ひっくり返った！

ほれ、運べ。

タケ
トメ
りん

タケとトメ、小さな手で大きな石を運ぶ。

りん、続けてアラクオコシをする。

りん
タケ
イテー。(掌を見る) 皮むけた。

大丈夫だか。

何も。こんなの唾つければ直ちまう。ぺつ、ぺつ！

タケ・トメ
きたねえ。

おめえたち、とうちゃんの手見たろ。こんな大きなタ

コができてんの。

とうちゃん、自慢しとつたなあ。

それに比べたら。

でもあれ、足が八本ねえべ。

馬鹿。タコがちがうべ。(皆、笑う)

りん
トメ
りん

トそこに乞食(喜衛門)、現れる。

乞食
恵まれた者 恵まれぬ者

一字違いで 天地の違い

恵みは水の 流れるごとし

低きへ低きへ 注ぎいるなり

ねえちゃん。

知らん顔してろ。

タケ
りん

乞食、りんの前に近づく。りんは無視して鍬を振るっている。

乞食、りんの前で鈴など振る。

りん 何だべ、おじさん。

乞食 (手を出す)

りん 何もねえぞ。他行ったらどうだ。開墾社の事務所で
も。

乞食 (手を振り――)

りん 何だべ？ 手伝ってくれるだか。

乞食 (手を振り――)

りん だったら――

乞食 (手を開く、ト手の中に芋がある)

タケ あ、イモだんべ。

乞食 ほれ。

タケ くれるだか。

トメ くれるだか。

乞食 ほれ。

りん やめろ、タケ。おらたちは――ちがう。

乞食 何がちがう？

りん ――。おらたちは、物貰いじゃねえ。

乞食 物貰いの方がおまえたちよりええ物食つとる。

りん タケ。トメ。手出したら、ねえちゃん承知しねえぞ。

乞食 (イモ食べる――さもおいしそうに)

タケ・トメ あー！

りん、再び耕し始める。タケとトメ、しょうがなしに
石を運ぶ。

トメ 乞食はタケとトメが運ぼうとする石を足で踏みつけ
邪魔をする。

タケ 何するんだ！

乞食 石のけてどうなる、石また石のこの土地で。

タケ どうなるって……(りんを見る)

りん 一つ一つのけてれば、石はなくなるだんべ。

乞食 (笑う) なくなるものか。

りん なくなる！

乞食 そのうち手の皮が皆むけてしまうぞ。

りん おじさん誰だべ？

乞食 わしか。ハッ、さしずめ百姓になりたいと思つとる侍
じゃ。

タケ・トメ 侍か、おじさん。侍か。

りん なら、あんたには百姓無理だんべ。
乞食 何？

りん そこに石があれば石のけるのが百姓だんべ。
乞食 田ができるなら、それもよからう。

りん できるさ。疏水だって近いうちにできるととうちゃん
言うてたべ。

乞食 (笑う) 大人の言うことを信じちゃならん。お上の言
うことを信じちゃならん。疏水をつくる気があるなら
もうとつくの昔にできてるはずだわ。お上はわしら侍
を見殺しにした。今度はおまえたち百姓の番だ。

りん おら、お上のことなんて知らねえ。百姓は土起こして、
田つくって、米つくって――

乞食 どこに田がある、米がある。石ばかりで水もない。こ
の那須野の開拓は鉄もろくに握ったことのない者たち
が机の上に地図を広げて決めたこと。この荒地地に何
百町歩の田ができるとおまえは思うのか。
……

りん さ、おまえもわしも見捨てられた者同士、仲良くする
乞食 べ。(イモを差し出す)

タケ ねえちゃん、もらってもええか。

りん とうちゃんが今にたんと米買うて来る。

トメ まんじゅうもか。

りん ねえちゃんが粟(あわ)で饅頭こさえてやる。

トメ うまくねえぞ、あれ。

りん うるさい。黙って石運べ。おじさん、帰ってくれ。邪
魔しねえでくれ。おら難しいこと何もわかんねえ。お
らが今知ってんのは――

とタケが火のついたように泣き出す。

トメ ねえちゃん！

りん どうしたべ？

トメ あんちゃんが石、足の上に落つことした！

りん 大丈夫か、タケ！

トメ 血が出るべ。

りん たいしたことねえ。(唾つけようとする)

タケ おら嫌だ。もう石運ばねえ。運ばねえ。(泣く)

トメ (釣られて泣く)

りん 泣くな、タケ。泣くな、トメ。おめえたち男だべ。

タケ・トメ

(さらに泣く)

りん

(タケの足をさすりながら、乞食に) おらが今知って
んのは——とうちゃんやかあちゃんがしてることだけ
だ。夜も明けねえうちから起きて炭俵売りに行つて、
水汲んで、役納めて、土耕して、縄もじつて、じつと
してることなんてこれっぽちもねえってことだ。そ
れしか今のおらにはわかんねえ! ——何だ、こんな
石! (石蹴飛ばす) アツ——! (足が痛い)

タケ・トメ

ねえちゃん!

くそ! (石さらに蹴飛ばす) おら負けねえ、おら負け
ねえぞ。何だ、こんな石! (石を投げる)

乞食

(りに) おまえ、泣いてるんじゃないのか。

りん

(泣き声になりながらも) 泣いてなんかねえ! おら
決めたんだ、この那須野の大地に約束したんだ、一生
泣かねえって、一生泣かねえって——。

暗転。

第二幕

4

闇の中を照らす一条の光。一つが二つに増え、無数に
なり交差する。

男たちが歌う「隧道工事の歌」が聞こえてくる。

「隧道工事の歌」

ズイドウ ズイドウ ズイドッドー

土を運べ ズイドッドー

山を掘れほれ 穴開ける

水を通すだ ズイドッドー

疏水にするだ ズイドッドー

ズイドウ ズイドウ ズイドッドー

現場監督

この西岩崎の隧道の試験掘りでわしらの運命が決まる
のだ。それを忘れるな、ええか。つまりは疏水ができ
るかどうか、この那須野が原が水の大地に生まれ変わ
るかどうかの別れ目なのだ。隧道が通じればお上は費
用を出してください。疏水を引いてください。印南様
も矢板様もこの隧道の試験掘りに賭けておられるのだ
……

現場監督の話の間に次第に隧道（トンネル）を掘っている様子が見えてくる。先程の光は工事用のカンテラの明かりであった。隧道を掘る者、土をもつこで運ぶ者など。移住人、旧村の者、工事専門の土方たちが混じって働いている。喜衛門もその様子を見ている。人々の中にもりんの父がいる。作業に慣れておらずまごついている。

（時は明治十七年の暮）

土方 何ぼさつとしてるんだ！

父 へい。

土方 土運ぶの手伝ってやれ。

父、傍らの人夫（移住人）がもつこに土を入れているのを手伝う。

父 慣れてねえもんで。

人夫 心配すんな。ぼちぼちやるべ。

父 あんたはここ長いんだか。

人夫 おらか。（指を折る）半年にはなるべ。隧道掘りが始まった頃はすぐにでも疏水の工事に移るもんだとばかり思ってたけど、どうなってるんだか。

父 （小声で）駄目なのか。

人夫 さあ、わかんねえ。いつまでも穴掘っててもしょうがねえようには思うんだけど。――（父の仕事着見て）しかしおめえ、寒そうな格好してるな。

父 これしかねえもんで。

人夫 これから風がひどくなるべ。それじゃあなあ。ハンテソを着て、ホツカムリでもしねえことには。

父 そうだべか。

人夫 田植えるんでねえんだから。

父 ……

人夫 ほれ。（懐から手拭を出し父に渡す。それでホツカムリをしるの意）よし。さ、運んだ、運んだ。

二人、もつこで土を運ぶ。

トそこに移住人たちとは様子の違う男がやって来る。

人夫の一人を捕まえて、

男
人夫

おい、国吉はいるか。国吉熊蔵。
何だ、おぬしは？
（凄んで）ハッ、何だ、おぬしは——ハッ！（ト胸倉をつかんで離す）

ト人夫の一人が逃げ出そうとする。男、人夫を捕まえる。男は実は借金取りであり、逃げ出そうとした人夫はうめの父である。

借金取り

おい、どこへ行く？

うめ父

勘弁してください。

借金取り

逃げやがって。今月は利子もまとめて返してもらおうかな。

うめ父

（手を合わせ）この通りです。おらたち一家も食うや食わずで……。あんたところに返す当てにしとつたソバが風に吹かれていくらも実らんかった。かといってあんたところから肥やしを前借りさしてもらわんと何の作物もできんし……

借金取り

前にも同じ台詞聞いたわ。

うめ父

そこを何とか。

借金取り

うるさい。ええか、わしらも霞食うて生きとるわけじやない。ちゃんと払うもん払ってもらわんとこつちにも考えがある。

うめ父

考えって……、何だべ？

借金取り

おまえ、娘がおったのお。名前は、うめだったか。金が返せんかったら娘もらつていくぞ。

うめ父

そんなことできねえだんべ。

借金取り

それなら、国に手紙書いて融通してもらいな。

うめ父

国とはけんかして出て来とるんだ。

借金取り

そんなこと知るか。とにかく、大晦日までには銭用意しときな。わかつたな。（去る）

うめの父、呆然と立ち尽す。その様子をりんの父が心配げに見ている。

トそこに開墾社の社員が来る。

社員
監督

（現場監督に）おい、皆を集めてくれ。
おおい！ 話がある！ 集まってくれー！

一同、集まる。

社員

ええか、聞いてくれ。きょうの作業はこれで止めだ。皆、道具片付けて帰ってくれ。以上だ。

人夫い

どうしたんだべ、急に？

人夫う

わけ教えてくれねえとな。

人夫え

もしかして疏水の許しが下りたんじゃねえのか。だったら何で中止にするんだべ。

社員

とにかく。工事は中止だ。きょうの分の手間賃は事務

社員

所でもらって帰ってくれ。

うめ父

あしたからどうなるんだべ？

社員

あしたからは来なくていい。

うめ父

何だ？

社員

当分の間工事は見合わせる。

うめ父

ええ！

社員

どういうことだんべ？

う

隧道通じるのもう少しでねえか。

え

見合わせるってのはどういうことだ、見合わせるって

人夫お

――

社員

きょうだけじゃねえのか――

社員

疏水はどうなるんだ、疏水は――

う

わけを言え、わけを――

お

当分とはどういうことだ、いつまで続くんだ――

い

ここまでやって疏水が駄目になったっていうんじゃね

い

えだろろな――

お

皆、騒然となる。

若いの一

トそこに印半纏を羽織った隧道工事の親方が若い連中

若いの二

を引き連れてやって来る。

若いの三

おら、どけどけ！

若いの四

親方のお通りだ！

父

印南はどこ行った！

う

矢板を出せ、矢板を！

親方

誰だべ？

う

沼尾組の親方だんべ。

親方

福島で安積疏水工事した有名な親方だ。

若いの一

おう、印南さん出してもらおうか。この沼尾の前から

若いの二

雲隠れとはええ度胸だわ。

若いの三

(しゃしゃり出て) 安積ではこんなことなかったぞ、

若いの四

おら！

おら！

おら！

おら！

おら！

親方
若いの一
（若いのの頭をどつく）
すみませんッ！（引っ込む）

社員
親方
沼尾さん、あつちの事務所の方で……
いんや！ あんたら頭がええからのお、寄ってたかつて言いくるめられたらかなわんわ。皆のおる前で正々堂々話聞かせてもらおうか。さ、印南社長はどこにおる。幹事の矢板は——
今、上京されとる。

社員
親方
東京か。で、いつ帰る？
わからん。

親方
わからんとは何だ、わからんとは！ 印南は東京の銀行に泣きつきに行つたんじゃないのか。ええか。今週中に今までの掛かり払つてもらわんとただじゃおかんぞ、ええ！ 首括る前に後始末だけはしていけよう！

社員
い
（他の人夫らに）首括るつてどういう意味だべ。
印南社長はそんなお方ではない。今必死になつて政府のお偉方に疏水の交渉に当たつておられるんだ。

おえう
何だべ！ 今さらお上と会う必要があるんだか。
疏水はとつくの昔に約束されとるんじゃねえのか。
隧道さえうまくいけば許しはもらえるはずだんべ。

親方
おまえらおめでたい連中じゃのう。この隧道は印南矢板の見切り発車じゃ。疏水の許可の見通しなんてこれっぽっちもないんじゃ。

社員
そんなことはない。この隧道工事で岩質が良好であり、工事日数もかからぬことがわかればお上は——
何の沙汰もないというじゃないか。だからあせつて上京しとるんだ。こいつらは騙せてもわしは騙せん。
こっちはお上にも何人か知つたお方がおるんだ。
どういふことだべ、おい！

社員
親方
印南社長は東京で前後不覚の死ぬ思いをされてまで、この疏水に、那須野の未来に賭けておられるんだ。
うそを言え！ 疏水じゃない！ 疏水でなく運河をつくりたいんだ。ここに船を通したいんだ、印南と矢板は！

父
い
運河——
船——

親方
しみつたれた開墾事業より船を通して儲けたいんだ。
那珂川から鬼怒川へ、鬼怒川から利根川へ船を通して、東京の大市場に荷物運んでがっばがっばといきたいの

よ。おまえらみたいな移住人のことなどこれっぽっちも考えてない——

印南様ほどこの那須野のことを考えている人はいない。矢板様ほど移住人たちのことを思わぬ人はいない。二人とも自分の家屋敷を抵当に入れてまで——。いくら親方でもその口のききようは——

では何で、この鉄道の時代に運河なんて寝ぼけたこと言ってる。欲に目がくらんで物事を冷静に考えられなくなってるんとかうか。

社員
親方
運河は金がかかり過ぎるんじゃ。だからお上も動かない。疏水なんて夢のまた夢。

どうなってるんだべ——

おらたちを見殺しにする気か——

一同
うい
そうだ、そうだ！

また騒然とする。

父
おらたちのほしいのは運河じゃねえ。おらたち水引いて田つくりてえんだ。その夢あるから食う物食わずここにしがみついてるんだ。運河なんてできて何になる。今さらおらたちに船頭にでもなれってのか。あんたからも何とかあきらめるように言うてくれ。運河なんていらねえ。田に水引く疏水がほしいんだんべ！

人夫たち、社員のぐるりを取り囲む。

社員
（気圧されて）とにかく、きようは中止だ。（親方に近づき小声で）親方、悪いようにはしねえから、きょうのところは……（ト親方の肩を抱き、事務所へ連れて行こうとする）

うめ父
待ってくれ！ おら銭がいるんだ、銭が。な、あしたもここで働かせてくれ。お願えだ、働かせてくれ、働かせてくれ。（泣く）

りんの父、うづくまるうめの父の肩を抱く。社員と親方をきつと見上げる。——暗転。

5

語り

年明けて翌明治十八年の春、隧道の試し掘りは成功したが、政府からは何の音沙汰もなかった。

広く世を見渡せば、明治維新以来もつとも悲惨な季節が民衆の上に訪れていた。大不況による物価の下落に加え、暴風雨や冷害による農作物の不作が続き、全国的な飢饉に見舞われていた。木の皮や草の根をかじり、死んだ馬の肉を食べ、ようやく飢えをしのぐという有様が各地の農村で見られた。税金が払えず借金を返せない百姓は先祖伝来の土地を泣く泣く手放さなければならなかった。

政府はというと、富国強兵のための財政の建て直しに汲々としており、民衆に対しては「労働ノ度ヲ増シ貯蓄ノ法ヲ設クルノ途アルノミ」との冷たいお達し。つまりは、朝から晩まで寝る暇もなく働いている人々に対し、さらに働けるだけ働いて借金を返し自分で生活を建て直せというのだ。(つい本音が出て)ひでえ話だ。

りんの家の外(畑)。

りん、タケ、トメ、りんの父母。父の傍らには炭俵を積んだ荷車がある。

父

(タケとトメに) ええか、ねえちゃんが種蒔いて、その後からタケが肥やし撒くんだ。それでトメが土かける。

タケ

ねえちゃんが、まいて、——おらが、まくのか。

トメ

おらは土をかける。

父

そうだ。ねえちゃんの後ずつとついてけ。ええな。

タケ・トメ

うん。

父

何とかここまで耕したんだから、石一つ一つのけて。

タケ

種だつて銭と思え。

父

とうちやん、これは何だべ？

これは特製の肥やしだ。これがええと他の者から聞いたんだべ。

りん

かあちゃんが一晩中白引いてた、あれか。

母

そうだつぺ。

父

そんなら、おらたち行ってくるからな。

父、荷車を引く。ト母が目眩(めまい)に襲われ、ふらふらとなる。

父 母 父

どうした？

(平静を装い) 何でもねえ。とうちゃんこそ、腰！
ああ。(腰を二三度叩く)

二人、行く。その父母のうしろ姿をりんたちはじっと
見ている。

りん
タケ
りん
タケ
りん

(袖をまくって) よし、踏んばるべ。

あ、かあちゃんみてえだ！

え？

その言い方！

うるさい！

りんたち、歌をうたいながら種を蒔き、肥やしを撒き、
土をかける。

歌

水なし水のこの土地に

汗と涙がしみてきて ホレ

種さ蒔いては 日が暮れる

ト気づくと乞食がりんたちの様子を見ている。乞食は
土を手にし、そのよく耕されているのに驚く。(が、そ
れを表には現さない)

タケ
りん
歌

ねえちゃん。

気にすんな。(さらに種を蒔き続ける)

石から石のこの土地に

汗と涙がしみてきて ホレ

肥やし撒いては 月が出る

ト乞食はいなくなっている。

トメ
りん

あれ、もういねえ。

……。

ト旧村の男の子たちが来る。

男子一
タケ
りん

よう、元気にしとったか。

あ、おぬしら。

(睨む) 何しに来たんだべ？

男子一 怖いろう。ちょっと遊びにきただけだ。

タケ ここはおぬしらの来るとこじゃねえ。

男子一 ねえちゃんと一緒にだと一段と威勢がええべ。

タケ 何を！

りん やめろ、タケ！

男子一 泥棒の子はおつかねえべ。

りん 何？

男子一 泥棒と言うたんだべ。

りん 何で、おらたちが――

男子一 親父が泥棒だから泥棒だんべ。なあ。(男子二に)

男子二 なあ。(男子三に)

男子三 なあ。

りん 男らしくねえな、はっきり言え、はっきり。

男子一 なら、言うてやる。その肥やしどっから手に入れた？

タケ これはとうちゃんが……

男子一 そうだ。おぬしの親父が馬の死骸捨て場から盗んでき

たんだ。

タケ 馬の……？

りん 死骸捨て場……？

男子一 それは馬の骨をすりつぶして粉にしたもんだんべ。

タケ ひえええ！（思わず馬粉の入った桶を放り出してしまふ）

男子一 気持ち悪いべ。

男子二 気持ち悪いだんべ。

男子三 まったくもって気持ち悪いだんべなあ。(三人笑う)

タケ くそお！

タケ、挑みかかる。

トそこにうめ、ぎん、さくらの三人が通りかかる。皆背の籠に萱を一杯詰めている。うめは手にお手玉を持っている。

タケ、三人組にやられてしまふ。

男子一 弱いべ。

男子二 弱いだんべ。

男子三 まったくもって弱いだんべなあ。(また笑う)

うめ おめえたち、寄ってたかって何してるんだ！

りん うめちゃん。ぎんちゃん。さくらちゃん。

ぎん 弱い者いじめしたらどうなるかわかってんのか。

さくら わかってねえなら、わからせてやるべ。

女子三人組、馬粉の桶を拾い男子三人組の前へつかつかと歩み出る。ト馬粉を男子三人組の顔に投げつける。

男子一 何すんだべ！

男子二 ペッ！ ペッ！

男子三 あ、あー、目、痛え！（泣く）

男子一 覚えてろ！（男子三人、去る）

うめ 待て、こら！

女子三人組、追いかけて去る。

りん、追いかけてようとするが、あきらめ、立ち尽す。

タケはしくしく泣いている。そのそばにトメがいる。

りん、馬粉の桶を拾って、

（タケに）撒け。

おら、嫌だ。

撒け。

…。

間。りん、一人馬粉を撒き始める。「種蒔きうた」を歌う。

りん

石から石のこの土地に

汗と涙がしみてきて ホレ

肥やし撒いては 月が出る

あんちゃん…。

トメ

タケ、怒ったようにりんから桶を奪い取ると馬粉を撒き始める。トメも後に続く。姉弟三人、空元気を出して「種蒔きうた」を歌う。

溶暗。

激しい風の音。那須風が萱原を渡っていく。（音楽・踊り）

舞台明るくなる。トリんの家。その日の夕方。強い風にかが吹き飛ばされないように一家皆で作業をしている。掘建小屋に突っかい棒をしたり、萱で作った縄の片端を軒下に結び、その反対端を石に括りつけ土中に埋め家の支えにしたりしている。

りん

とうちゃん、風が強うなってきたべ。

母 ばあちゃん、もう引っこんでろ。吹き飛ばされっぞ。
祖母 アワワワワワ——（風によるける）

風がさらに強くなって、立ってられないほどになる。祖母などは本当に吹き飛ばされそうになる。家も傾いてくる。

父 おい、タケ、そっちの縄引っ張ってくれ。

りん あれ、トメイねえぞ。

トメイ （畑の方から戻ってきて）とうちゃん！ とうちゃん！

父 何してるべ？

トメイ たいへんだ！ タネが飛ばされるぞ！

父 ああ、本当だ！ くそお！ くそお！

りん 風の神様——！ やめてくれ——！ 種飛ばさねえでくれ——！

タケ・トメイ やめてくれ！ やめてくれ——！

皆、必死に種を吹き飛ばされまいとするが、どうすることもできない。
ト風に乗って鋭い半鐘の音が聞こえてくる。

父 何だべ？

ト移住人二人、駆けてくる。

移住人か 野火だ——！ 野火だぞ——！

移住人き 野火だんべ！

移住人か 男どもは開墾社に集まれ——！

移住人き 皆で火食い止めるんだ！（去る）

父 しょうがねえ。おら、開墾社へ行ってくる。かあちゃん、後は頼んだぞ。（駆け去る）

母 気つけてな。

りん どうする、かあちゃん？

母 とりあえずいるもんを外に運び出すべ。ばあちゃん、タケとトメイ連れてあっち行っててくれ。

りんたち、家の中から何やかやと運び出そうとするが

タケ （離れた所で——のんびりと）かあちゃん。

母 何だべ？

タケ 狐がいるべ。

トメ 狐がいるべ。

母 何だって？

タケ 狐がたくさん——

母 野火から逃げてるんだきつと。

タケ・トメ たくさん、たくさん——

ト移住人の一人が駆けてくる。

移住人く おーい！ 何してるんだ！ はよ逃げろ！ 火がそこ

まで来てるだんべ！

りんたち ええ！

火が無数の金毛の狐のようにりんたちに迫ってくる。

りん かあちゃん、もう駄目だ！

りん、母、持てるだけの物を持って、祖母たちの所へ逃げる。

金毛の狐の火はりんの家を飲み込んでいく。
しばらく皆、呆然とそれを見ていたが——

母 ああ、しまった！（ト燃え盛る火の中へ駆けていく）

りん かあちゃん！ 何するべ！

タケ・トメ かあちゃん！ かあちゃん！

祖母 みつ！

踊り狂う金毛の狐たちが母を飲み込んでいく。

タケ・トメ ああ！

りん かあちゃん！（駆け出そうとするが）

祖母 （りんを止めて）駄目だ、りん。

りん ばあちゃん。

祖母 ここで待ってろ。

りん でも——

祖母 大丈夫だ、大丈夫だ……。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……

ト母が崩れ落ちる家の中から狐たちを振り払うように

して転げ出てくる。りんたち、母に抱きつく。

りん

かあちゃん、何で、何で？

母

(胸に何か抱えている)これをな、これを忘れとった。

タケ

何だべ、それ？

母

打ち掛けだ。

りん

打ち掛け？

母

ん。いつかりんを嫁に出す時に着せてやろうと思って

な。これはおらが嫁になる日にじいちゃんが町で買う

て来てくれた物なんだ。どんな時も売らねえで大事に

しまつてた物なんだ。

りん

あん時の……。

母

それをこんな野火なんかでなくしてたまるもんか。

りん

かあちゃん、かあちゃん……！

りん、母の胸で泣く。

りん語り

野火はな、金毛九尾の狐のようにきれいだった。おら、あん時何故だかわかんねえけど、涙があふれて……

家はついに燃えてなくなる。白々と夜が明けてくる。

焼け野原となった家の前に皆呆然と立つ。

母

……ばあちゃん。

祖母

何だべ？

母

おらたち間違えたかな、ここに来たこと。家もなくな

つちまつた。飯食うお椀も箸もねえ。

りん

かあちゃん。おら平気だんべ。みんなが一緒なら何も

辛くねえ。

母

りん。

それに家はまた建てればええ。

りん

うん、おらが萱集めてくるべ。

タケ

おらも。

母

タケ。トメ。おめえたち知らねえ間に随分たくましく

なつて……。

祖母

親見て子は育つ、だ。

母

ばあちゃん……。

父の声

おーい！

ト父が帰ってくる。

父 気持ちええぐらい焼けてしまったべ。

タケ・トメ とうちゃん！（抱きつく）

父 何も心配いらねえ。雨の日があれば必ず晴れの日もあるんだ。

母 何かええことあったんだべ。

父 わかるか。

母 わかるわ。顔に書いてある。

りん もったいぶらんとはよ教えてくれ。

父 今朝、印南様と矢板様が東京から帰ってこられた。

一同 うん。（うなづく）

父 そしてこう言われた。「皆の衆。雨の日があれば必ず晴れの日もあるんだ」

一同 うん。（うなづく）

父 「ついに疏水の許しが下りたぞー！」

一同 うああ！（飛び上がって喜ぶ）

父 （母に）運河をあきらめてくださったんだ。

タケ （何かに気づいて）とうちゃん。とうちゃん。

父 どうした、タケ？

タケ 出てる。出てるんだ。

父 何が出てる？

タケ 芽が出てる！

父 ええ！

タケ おらたちの蒔いた種から。かあちゃん！ かあちゃん！（抱きつく）

母 よかったな、タケ、トメ。——！（ト激しい痙攣に襲われる）

タケ・トメ かあちゃん、かあちゃん。

りん かあちゃん、しっかりしろ。ああ、泡ふいとる！ か

あちゃん！ かあちゃん！

母、りんの腕の中で気を失い倒れる。

暗転。

6

りん語り

疏水の工事は印南様たちの帰りを待って始められた。那須開墾社の人たちはもちろん、原の者、村の者、工事人夫や宇都宮監獄の囚人まで、いろんな人たちの力で疏水はたったの五ヶ月で完成しようとしていた。

季節は春から夏を過ぎ秋になってた。野火に焼かれたおらたちの家はあつという間に建て直すことができたけど、かあちゃんの病は重くなる一方だった。かあちゃんは鎌で切った傷が元で破傷風にやられてたんだ。…そして、その日がやって来たのは疏水の完成を祝う通水式の前の日だった。

りんの家。疏水通水式（明治十八年九月十五日）の前日。

タケが一人、開墾した畑へ出て穂のない陸稲を見つめている。

乞食がその様子を見ている。

寂しい虫の音。

タケ

ちくしよう！（陸稲を引き抜き、投げ捨てる）

りん、家から出てくる。

りん

タケ、かあちゃん呼んでるぞ。タケ。

タケ

おら戻りたくねえ。

りん

何言ってる。かあちゃん、もう——駄目かしんねえんだぞ。

タケ

ちくしよう！ちくしよう！（また陸稲を引き抜く）

りん

タケ！

タケ

何で、ねえちゃん、おらたちこんな目に会うんだべ。

りん

先祖が崇ってんだべか。

タケ

ご先祖様はおらたちを守ってくださいるもんだ。

りん

だったら、何で——。ちくしよう！（また陸稲を引き抜く）

りん

また来年植えるべ。

タケ

来年じゃ間に合わねえ。穂のない陸稲なんてあるもんか！

祖母、家から出てくる。

祖母

タケ、何してる。

りん

タケ、来い。（タケを連れて家へ入る）

乞食、タケの抜いた陸稲を手を取って見る。（立ち去る）
家の中では母が粗末な床に伏せている。そばにトメ

もいる。父はいない。
タケ、座敷の隅にすわる。

母 どうしたタケ。こっち来て顔見せてくれ。

タケ (背を向ける)

母 ……

りん かあちゃん。タケが馬粉撒いてくれた陸稲な……

タケ (振り向く)

りん そりゃあ見事に実つとる。ほんにタケはよう世話してくれた。

タケ ねえちゃん——!

りん (身振りで) こんな実つけて稲穂垂れとる。

母 そうか。そうか。(りんの意を汲んで) タケ。タケの陸稲、はよ食いてえなあ。

タケ かあちゃん。おらいつかここを田んぼにすつからな。米いっぺえ取るからな。きつと、きつと——。
母 うん。うん。

トこの時悄然と父が帰ってくる。

父 駄目だ、駄目だ。

りん とうちちゃん、お医者様は?

父 門前払えだ。

祖母 どうして、また?

父 保証人つけるとよ。おらたちみてえな薬代も払えねえやつ在所へは行けねえとよ。くそ……!!

母 ……。りん、頼みがあるんだ。

りん 何だべ?

りん おら、おめえの打ち掛け着たとこ見てみてえ。

母 かあちゃん。

りん おめえを嫁さ行かせるまではと思つてたけんど(首を振る)……。さ、着て見せてくれ。

りん かあちゃん——。

母 何泣いてんだ?

りん おら、おら——

父 売っちまったあ、あれ。売っちまったんだ、おめえに内緒で。——すまねえ、みつ。

母 とうちちゃん。(手を握って) この手。この手。ほんによう働いたなあ。鍬持った手だ。土と石と闘った手だ。こんなでつけえタコこさえて。おらの手強く握つてく

れ。顔撫でてくれ。

みつ——。

父 疏水の工事終ったんだな。

母 ああ、みんなで力合わせてな、すつぐと終わった。あ
したはおめえ、通水式だべ。お公家さんも見えるんだ。

母 どっちがきれいだべ？

父 どっちが？

母 アガノ川と、疏水の流れと——。見たかったなあ。

父 なあに、おぶつてでも連れてつてやる。

母 タケ、これで田んぼができるな。水、うんとあるも
な。

うん。

母 (祖母に) かあちゃん。

祖母 ええから、ええから。

母 トメ、許してくれな。

母 トメ、かあちゃん！(抱きつく)

母 りん。かあちゃんにはおめえの打ち掛け姿見えるんだ。

母 この目にはつきりと。おめえのきれいな花嫁姿が……。

母 かあちゃん——。

母 おらが死んだらな、鳥が森の丘の上におらの骸(むく
ろ)埋めてくれ。あそこなら、みんなのこと、ずつと、

母 ずつと——(息が苦しくなる)

母 かあちゃん。かあちゃん！

母、絶命。

りん (母の身体を必死でさする) かあちゃん、死なねえで

タケ くれ、かあちゃん！ かあちゃん——

タケ かあちゃん——

トメ かあちゃん——

皆、母の魂を呼び戻すかのように——

父 (泣き濡れながらも) みつ、疏水流れる水はアガノ川

の比じやねえぞ。まるで水飴みてえに透き通った水が
耳に心地ええ音立てて滑っていくんだ。おらたち一人

一人が願ひ込めて掘った堀を流れてくんた。

見てろよ、疏水から引いた水で田つくってやるからな。

その田に歌うたいながら青いちっこい苗、(苗を植える
動作) こうして、こうして植えてくんた、おらとりん

とタケとトメとばあちゃん。疏水の水吸って青い苗がぐんぐん伸びて、秋には黄金の穂が頭（こうべ）垂らして風にゆさゆさ揺れるんだ。そしたら石蔵でない、おらたちの本当の米蔵さできるんだ。

いつかこの那須野の大地は田んぼが面白えようにできて、人が増えて、家も立派になって、腹空かす者は誰一人いねえ所になる。おらたちが力役で植えた杉も雲より高うなって冷てえ空っ風からおらたちの家守ってくれる。ここはほんに夢みてえなところになるんだ。

たとえおらたちのこと誰も思いださねえ日が来ても、この疏水流れる水だけが変わんねえ。この那須野は水と緑の大地に生まれ変わって、おらたちの骸（むくろ）いつまでもやさしく包んでくれるんだ。なあ、みつー

父の語りの中に舞台は転換。通水式の場になる。

7

通水式の場。

山県有朋の那須疏水通水式祝辞を読み上げる声とする。疏水の取入口の回りにはお偉方がいる。他に移住人、村の者、那須開墾社社員、工事関係者など多数集まって通水を今か今かと待っている。

山県の声

……即ち全部を竣工するの日に至り、十里の荒原変じて稲梁（とうりょう）万頃（ばんけい）の美観を呈するに、けだし将に遠きにあらざらんとす。ここに通水式を行い、二品勲一等能久（よしひさ）親王殿下の臨場を辱（じよく）けす。あに喜びてこれを祝せざるを得んや。明治十八年九月十五日、内務卿（きょう）従三位勲一等伯爵山県有朋。

一同、拍手。

司会

ありがとうございます。政府を代表しまして、内務卿山県有朋伯爵様より御祝辞をいただきました。続きまして各開墾社の惣代といたしまして、那須開墾社社長印南丈様より御挨拶をいただきましたと存じます。

印南の声

ウホン。那須疏水相成り、北白川宮殿下及び貴頭（き

けん）閣下の来臨を辱し、ここに疏水の式を挙げらるることを誠にうれしく存じます。……

移住人け

（印南謝辞の途中——隣りの男に）あれ、誰だべ？

こ

山県さんのこれ（小指立てる）だんべや。

け 子どもまで連れて来て。

式典には山県有朋の女と思しき婦人が女の子を連れて来ている。

大人たちの話を聞いていた移住人の子どもたちがフランス人形のような洋服を着た女の子に近づく。婦人は眉をひそめ白い絹のハンカチで鼻を覆い移住人の子どもたちを見る。

ト女の子、大根をかじっていた男の子の前に一歩進み出る。

婦人

これ！

女の子

何、それ？

男の子

食うか。（渡そうとする）

移住人達

（成り行きをじっと見ている）

社員

（横から飛んで来て、大根を払い落とす）こら、あつち行け！（声が大きく、謝辞の邪魔になったかと慌てる）さ、しっ、しっ。

移住人の女の子の一人が女の子のスカートを物珍しげにつまむ。

女の子

きやつ！

社員

こら！

子どもたち、逃げる。社員、追いかけて去る。

女の子、大根を持っていた男の子と目が合う。女の子は落ちた大根を見、それから男の子を見る。——とプイと行ってしまふ。

男の子、女の子の行った方を見ながら、大根を拾ってかじる。

印南の声

……ここに奮って相勤め、開墾に植樹に牧畜に、日に成り月に進んで、もってこの盛世に答え奉らんと欲する次第であります。那須開墾社社長印南丈作。

一同、拍手。

司会

ありがとうございます。それではいよいよ通水の儀に移らせていただきます。北白川能久親王殿下より通水のお声をおかけいただきたいと存じます。

北白川宮

(女性のような甲高い声で) 取入口の堰を上げろー。

声が段々下の者に下がっていく。

その声と同時に遠く静かに般若心経を唱える声が聞こえてくる。

印南

取入口の堰を上げろー！

社員

取入口の堰を上げろー！ ……

お経を唱える声が次第に大きくなる中、野辺送りの葬列がやって来る。和尚を先頭にりん一家がその後を並んでついて来る。

婦人と女の子がその様子を見ている。行き過ぎる葬列に向かい――

婦人

(りんの父に) どなたが？

火花が鳴る。

人々

水だ、水だ、水だんべ！

疏水に満々と水が流れ込む。人々の喜び頂点に達する。

父

(涙で言葉にならない)

タケ

行くべ、とうちゃん！

父、タケに促され婦人の前を通り過ぎる。

疏水をお偉方を乗せた小舟が通る。

婦人、父たちの様子に一人得心する。

婦人

(最後尾のりんに) これを。(ハンカチを差し出す)

りん

(毅然として首を振る) いらねえ。

婦人

ま！(親切を無にされたと思い、怒って立ち去る)

火花が鳴る。

りん

（形見となった母の手拭——包帯にしていた——を握りしめ）おら泣かねえ。泣かねえぞ、かあちゃん——！
りんたち一家、疏水に水の流れるのを万感の思いで見
る。
音楽高まる中——幕が下りる。

第三幕

8

語り

「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス——明治
二二年二月十一日、大日本帝国憲法、いわゆる明治憲
法が發布される。翌明治二三年には制限選挙ではあつ
たが総選挙が実施され、日本で初めての国会が開設さ
れる。

汽笛一声。

りん語り

そのころ西那須野にも停車場ができて、そりゃあ便利
になった。疏水も完成して移住人もぐんぐん増えたん
だ。

当時開墾社では畑作じゃいくらも儲からねえってんで、
植林に力入れてた。だども、木なんてものはすぐには
大きくなんねえから、その間はおらたちに落ち葉や下
草貸し付けて儲けてたんだな。だから開墾社では植林
を守るため野火には特に気をつけてた。それともう一
つ別にあるもんを厳しく取り締まってたんだ……

遠く、澄んだ歌声が聞こえてくる。

歌声

「那須野恋唄」
那須野が原に咲く花は
風に花びら むしられる
なぜなぜ咲くの 那須野の花よ

舞台明るくなるとそこは、りんの家。時は明治二二年
の秋。
娘になつたりんが歌いながら盥で洗濯をしている。

母（亡霊）が家で着物を編んでいる。
夕暮れ。畑では陸稲が実っている。

りん ああ、きれいになんねえ。腕がおかしくなってきた。

母（亡霊） ぶつくさ言うな。

りん 米といで、顔洗って、茶碗すすいで、着物洗って、こりゃ水じやねえ。

母（亡霊） 粗末にすんな、畑に撒くんだから。

りん かあちゃん……。

りん、振り向くと母は消えている。母のいた所には着物が置かれている。りん、また歌いながら洗濯をする。トそこにタケ（少し大きくなっている）が帰ってくる。背に籠一杯の栗を担いでいる。かなりの重さだ。

タケ ご機嫌だべ、ねえちゃん。

りん タケ。いっぺえ取って来たな。ええのは市場さ持ってつて、余ったのでソバカキだ。

タケ またソバカキか。

りん 栗が入ってるだけでもありがたいと思え。

ト家の陰からトメが裸で出て来て、

トメ ねえちゃん、まだか。

りん ああ、いけねえ、忘れてたべ。おめえが着物汚すからだ。

トメ チンチンちぢんじまったべ。

りん トメ！

りん、母（亡霊）が編んでいた着物を渡して、

りん 大事に着ろや。それ、かあちゃんの着物ほどいて作つたんだから。

トメ かあちゃんなんか、おら覚えてねえ。（家の奥に引つ込む）

……。

りん （栗を選び分けながら）ねえちゃん、とうちゃんは？

タケ 鉄道線路の工事人夫さ行ってる。もうすぐ帰るはずだ。

りん ばあちゃんは？

タケ いねえか。お寺にでも寄ってんだべか。何かといやお

寺だかなな。
年寄りのたまり場だ。
和尚さんのお説経聞きに行くのが楽しみなんだべ。

ト茂吉とその弟妹たちが来る。茂吉（青年）も籠一杯の粟を背負っている。茂吉の頭は丸坊主。トメも家中から出てくる。

茂吉 りんちゃーん！

タケ 茂吉あんちゃんだ。

弟妹達 おねえちゃーん！

りん せつもみねも太吉もみんな一緒か。

茂吉 栗取って、ついでに学校さ迎えに行ってきたんだ。

りん 学校か。

茂吉 できたばかりで木のいい匂いするべ。

りん おらも学校さ行きたかったな。

茂吉 タケ。おめえは行かねえのか、学校？

タケ うん……。

茂吉 習うってことはええぞ。おらも和尚様から字習ってんだ。

弟妹達 一緒に行くべ、タケちゃんよ、一緒に行くべ。

タケ ねえちゃん……。

りん おらとこは無理だ。かあちゃんいねえから。

タケ ……。

茂吉 （茂吉に）ところで何だ、その頭？

茂吉 （頭を撫でつつ）徴兵検査受けたんだ。喜作も一緒だったべ。

トメ 兵隊さんになるんか。

茂吉 ー。でも間違いない甲種合格だっぺ。喜作は地主の倅だからくじのがれすっだらうけど。

りん おめえがいなくなったら家（うち）困るべ。

茂吉 （話題変えて、畑の方を振り返り）そうだ、陸稲よう実ったなあ。

りん タケががんばったんだ。初めは穂も出なかったけど、ようやくな。

茂吉 おらも刈り取り手伝いに来るべ。

タケ 本当はおら、田つくりてえ。米つくりてえんだ。けど、水引けねえ。疏水あんのに水引けねえ。指くわえて見てるんだ、水の流れんのを。

りん 移住人は勝手に水使えねえんだもの。

タケ 何のための疎水なんだべ。なあ、茂吉あんちゃん。
茂吉 おら、今になって農業を学びてえって気持ちになっ
きたんだ。

りん 農業？

茂吉 前から和尚様に言われてたんだ。これからの百姓はも
つと農業のこと学ばねば駄目だって。でも、もう遅え
な……。

りん ……。

ト祖母が帰ってくる。風が出てくる。

祖母 りん、一荒れありそうだ。風が騒いでるべ。

りん どこ行ってたんだ？ お寺か。

祖母 いんや。(ぐったりとすわり込み、背の籠に入れた薪を
下ろす) 一日中歩き回ってこんだけだ。

りん 薪か。ほんにこの辺りは木がねえからな。

祖母 (茂吉に) もう日が暮れるべ。狐の出ねえうちに帰ん
な。

茂吉 うん。じゃ、さよなら。

祖母 気つけてな。

りん またな。

茂吉たち、去る。

祖母 タケ。おめえもう栗しまえったら。

祖母、タケを急かせて栗をしまう。

風がさらに激しくなる。雨も降ってくる。

トこの時父の音がする。

父の声 待ってくれ！ 何かの間違えだ、間違えだんべ！

父と巡視人たちが来る。父は巡視人たちを止めようと
するが、巡視人たちは構わず祖母の方へやって来る。

父 ばあちゃん、おめえ本当か！

りん 何だべ、とうちゃん？

巡視人あ (薪の入った籠を見つけ) ほら、やっぱりあっただん
べ！

巡視人い 間違いねえ！

父 ああ！（頭抱える）

巡視人あ 大変なことしてくれたな、ばあちゃんよ！

巡視人い どうなるかわかってんだべな！

祖母 南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經……

りん 何があつたんだべ？

巡視人あ このばあが開墾社の林に入って木を盗んだんだ。

りん ええ！

巡視人い 木の下に阿弥陀様のお札が落ちとつた。

巡視人あ ご丁寧の名前までちゃんと書いてな。なあ、「おとよ」

ばあさんよ。

祖母 南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經……

父 ばあちゃん！ 何でだべ？

祖母 柴取って何が悪い。薪拾って何が悪い。地べた落ちて

るもん拾って何で怒られなくちゃなんねえんだ。みんな

やつてることだ。（巡視人あに）おめえんとこのばあ

ちゃんだつてやつてるべ。

何を！ でたらめ言うな！

巡視人あ 早速矢板様に報告せねばならんな。

タケ おらたち、どうなるんだべ？

巡視人あ あすにでもここから立ち退いてもらおう！

巡視人い 土地も何もかもみんな没収だんべ！

父 （平伏して）これこの通り、勘弁してください。皆も

頭下げて許してもらおうべ。

祖母 （頭下げない）南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經……

父 ばあちゃん！

とりん、外に飛び出していく。

タケ ねえちゃん、どこ行くべ！

トメ ねえちゃん！

父 この那須野にやって来て五年、ようやくと陸稲と蕎麦
が実るようになったのに。馬鹿たれが！ 馬鹿たれ
が！

祖母 南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經……

父 お願いします。この通りです。許してください。許し
てください。

タケ・トメ 許してください。許してください。

父、タケ、トメ、土下座する。祖母は手を合わせてい
る。

巡視人あ 何ぼ頭下げられても許すわけにはいかねえんだ。

巡視人い 決まりは決まり。他に示しがつかねえからな。

巡視人あ さ、来い。(祖母を引っ張って行こうとする)

祖母 南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經……

巡視人あ 来いったら——(祖母、抵抗してなかなか動かない)

トリんの声。

りん ばあちゃん、ばあちゃん！

祖母 りん！

トリんが帰ってくる。寺の和尚を引っ張ってくる。

りん 早く、早く。

和尚 コラコラ、そう引っ張るな。息が切れてしまうぞ。

りん どうちゃん！ ばあちゃん！

父・祖母 りん！

巡視人あ 和尚様でねえか。

(息を整えながら、相手を制して) ええ、ええ。話は道々りんから聞いた。大変なことをしでかしたな、おとよさんよ。

祖母 和尚様！(初めて泣く) おら何もこんなことするつもりなんか——。ここに来て毎日毎日が綱渡りするみてえな暮らしたべ。おらなんか碌に働けもせんと——。

せめて薪くれえは何とかしねえと、おまんま食うのも気が引けて、気が引けて——。許して下せえ、許して下せえ。(大仰に泣く)

和尚 よしよし。(巡視人に) おぬしらもご苦労さんだべな。巡視人達 いいえ。

和尚 どうだべ、ここは一つわしに任せてくれんか。

巡視人あ え？

巡視人い しかし……

和尚 この者もこんだけ反省しとるんだから。

祖母 (また大仰に泣く)

和尚 な、今度これきり、慈悲の心で許してやってはくれまいか。

巡視人あ しかし……

矢板様にはわしからよう言うておく。おぬしらも自分の母親をこらしめるようで胸が痛むじやろ、な。昔か

巡視人あ　ら親をいじめるような者は成仏できぬと言うぞ。

巡視人あ　困ったなあ。
巡視人い　どうするべ。

和尚

巡視人あ　仕方ねえ。和尚様には世話になってるからな。

和尚　おとよさんよ。人間どんなに苦しくてもやってはなん

ねえことがあるんだべ。ここはしっかり念仏唱えて、
心改めるんだ。したら仏様も許してくださるべ。

祖母　（オイオイ泣く）

和尚　よし。わしはこれで。（去りかける）

父　ありがとうございます。ありがとうございます。

和尚　ええ、ええ。（巡視人に）それじゃな、後はよろしくな。

巡視人達　ご苦労さまです。

和尚　それにしても、ええ孫持ったの。

りん　（和尚に頭を下げる）

祖母　（りに向かい）南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経…

父　…
馬鹿たれが。馬鹿たれが。（祖母に抱きつく）

和尚、祖母たちの様子を見届けると家の外に出る。が

和尚　（戸外に出て）こりゃいかん！　大変じゃ！　いつの

間にか風が強うなってるぞ！

りん・タケ　あ、陸稲——！

りんとタケ、外へ飛び出る。畑のそばには乞食がいる。

りん・タケ　ああ！

陸稲が風にやられる。茎は折れ、穂が吹き飛ばされる。

タケ　おらの陸稲が、陸稲が——！

風雨さらに激しくなる。

トウめの声がする。

うめの声　かあちゃん！　かあちゃん！

女いの声　おいねさん！

うめ母　ひひひひ…

気の触れたうめの母がやって来る。手にはお碗を持っている。その後をうめと移住人女いが追い掛けてくる。

りん おばちゃん！

うめ 豊作だ、豊作だんべ。ひひ。うめ。米の飯だ。(泥をお

碗に掬い、そのまま手で食べようとする)

うめ かあちゃん。やめてくれ。それは泥だ。米なんかじゃねえ！

うめ 米だ、米だ！(食べようとする)

うめ かあちゃん――

うめ (うめの母のお碗を叩き落とす)

うめ 乞食 (一瞬乞食をきつと睨むが、すぐニタリと笑い) ひひひひひひ……

うめの母、去る。母を追ってうめも去る。
りんたち、荒れ狂う風の中に呆然と立つ。――暗転。

9

夢の中。(紗幕。または声のみ)

母の歌が聞こえて来る。田に稲穂が黄金に実っている。その稲穂を穏やかな風が揺らしている。

母歌

風から風のこの土地で

汗も涙も涸れ果てて ホレ

土を耕し 日が昇る

かあちゃん、見てみる。稲穂が垂れて地べたにつきそうだんべ。

母 もっと根元から刈れ。(笑いながら) ほれ、そんなへつぱり腰では駄目だ。

りん こんだけあれば一年は食う物に困んねえな。

母 (明るい冗談口調で) 蔵造らねばな。白壁のでつけえやつを。なあ、タケ。タケ。タケ……

タケの声 嫌だ！ 嫌だ！ おら行きたくねえ！ 行きたくねえよお！

ト夢が破られ現実に戻る。

タケが家の粗末な柱(または壁)にしがみついている。そのタケを父が引き離そうとしている。りんはそれを

見ている。祖母とトメはいない。

父　こら、タケ！

タケ　おら行きたくねえ、行きたくねえだんべ。

父　わがまま言うな。何度頭下げて頼んで来たと思っただ。

タケ　おらの知ったことでねえ。

父　この！（叩く）寿屋さ奉公行くのが何でそんなに嫌なんだ。二、三年辛抱したら何とかしてやつから。

タケ　何とかって、何だ？

父　んだから――

タケ　連れ戻してくれるのか。

父　（言葉に詰まる）

タケ　おら嫌だ！ みんなとここにいる。

父　タケ。汽車にも乗せてやるんだから。

タケ　おらここで田つくるんだ、米つくるんだ！　かあちゃんとは約束したんだから。

りん　タケ、とうちゃん困らせんな。うちにはもう何にもねえんだ。食う物も畑に蒔く種も――。みんな去年の大風で――。

タケ　ねえちゃんは卑怯だんべ。

りん　タケ。

タケ　おらだけ他所へ出して。ねえちゃんここに残るのか。

りん　……

父　ねえちゃんは大事な働き手だ。

トそこに移住人が二人やって来る。

移住人　鶴見さ、いるか。

移住人　大変だんべ。

父　何だべ？

い　疏水の水がとうとう涸れちまったんだ。

りん　え！

タケ　疏水が！

う　うん、そうだ。この日照り続きだよ。

い　西堀も縦堀もみんなだ。那珂川だって干上がりそうなんだから。

父　開墾社は何してるんだんべ。

う　開墾社だって何にもできねえさ。手こまねいて見てるだけだ。

父 じゃ、水汲みにまた一里の道を行って帰んなきゃなん
ねえのか。それじゃ前と同じでねえか。
元々自然にはかなわねえんだ、人間なんて。
もうこの那須野も行き詰まっちゃっただな。
あしたからどうするか。
父 どうするもこうするも……。
う それにしても開墾社も冷てえべ。
う おうよ、水はねえ、種はねえでおらたち移住人がこ
う だけ困ってんのに。
父 (移住人いをつついて) おい、噂をすれば……
お、開墾社の権藤さんでねえか。こつち来るべ。
何だって。(移住人の二人に) おい、おらいねえって言
つてくれ。

父、開墾社の社員を認めると慌てて隠れようとする。
が、狭い家に隠れる所などない。
ト開墾社社員が来る。手に帳面を持っている。

社員 おお、おぬしらもおったのか。丁度ええ。鶴見さいる
か。
う いるには、いるけど……。
父 (りんの父に) おい。
父 (観念して) こりやどうも権藤さん。上がってください
え。

(家が狭いのと汚いのとで) いや、わしはここでええ。
(帳面をめくりながら) 早速なんだが、義務力役の件
だ。鶴見さこのところさっぱり役を納めとらんの。

父 ……。
社員 それに、落ち葉さらいの下草料も納めてない。
父 ……。

社員 (帳面から目を起こし) ん？ おめえ、口あるべ。何
とか言うたらどうだ？ わしは前来た時も――
父 (大の字に寝転がり) さあ、煮るなど焼くなど、好き
なようにしてくれ！

社員 おいおい。
社員 おら一日だって手間仕事出ねえと飢死にしちまうんだ。
力役なんて出れるもんじゃねえ！
社員 力役は移住人の大切な役目だ。役を納めねば土地はや
れぬぞ。

父 ハッ！ 土地もらったって何になる！ (トいきなり

正座して）いや——、この通り、頼むからもっと自由に水引けるようにしてくれ。思う存分田つくらせてくれ。そうすれば、何とかなるかもしれないねえんだから——。

社員
本末転倒だわ。役も納められぬ者が田などつくれるものか。それに土地を持たぬ者が疏水の使い方を云々するのは十年早いわ。

父
おらたちがつくった疏水でねえか。疏水は元々おらたちの田つくるための水だんべ。お上のお偉方や大農場の地主ばかりええ目見て。

社員
よくわきまえろ。おまえたちはただの移住人だ。大体、疏水の維持管理に年にしていくらの金がかかるのかおまえたちは知らんのだ。やれ堀が崩れたの、取入口に砂利が詰まったの。

い
維持管理つたつて、水が涸れりやいらねえじやねえか、なあ。

う
ああ。
社員
おぬしらまで文句をつけるのか。（帳面をめくつて）駒井さも梶川さも下草料がたまつておるぞ。

い・う
社員
……。
ええか。役は納めねばならぬ。これは開墾社とおまえたちとの契約だ。役を納められぬ者は代人料として金を払うか、さもなければ返地してもらおう。
返地つて？

りん
社員
土地を皆返してもらおう。土地のない者に疏水の水利権はない。水利権のない者に田など一生つくれるものか！

タケ、社員に飛びかかる。

社員
何するんだべ！
タケ
おらここで田つくるんだ！ つくるつてたら、つくるんだ！

社員
何だ、このガキは！（タケを突き飛ばす）
タケ
くそ！（さらに挑みかかろうとする）
やめろ、タケ！

りん
（りんにともなく、社員にともなく）おら奉公さすつから、その銭やつから、土地取り上げねえでくれ、取り上げねえでくれ——。

タケ

ト父が空の袋（稗・蕎麦など普段わずかの食料を入れている物）を取り出し、頭に被って踊り始める。

父 米もねえ、銭もねえ、袋の中は何にもねえ、とうちやんほんに甲斐性なし！

鶴見さ？

父 い どうしたべ？

見てみるや！ 稗も粟も蕎麦もねえ。きょうにでも子どもを奉公に出さねばどうしようもなんねえんだ！

（ト狂ったように笑い出す）

おい、気しつかり持て！

あ い 鶴見さ、おい！

社員 （気圧されて）ええか、もう一度言うておく、役を納めぬ者は――

父 （なおも踊りながら）米もねえ、銭もねえ、袋の中は何にもねえ、とうちやんほんに甲斐性なし！

社員 よし、もう相手にせぬわ！（蹴立って行こうとする）

りん、追いかけて社員の袖をつかむ。

りん 待ってください。どうか、お願いします。

社員 ええから離せ！

りん 種がないんです！ 春なのに、春なのに！ 働けば何とかなると思ってたがんばってきたのに――。せめて種があれば、春蒔く種がありさえすれば――。

社員 ……わかった。社長には伝えておこう。（去りかけて）わしも立場は違えど同じ那須野に暮らす人間だ。それだけはわかってもらいたい。

社員、去る。りん、頭を下げる。

父 何が返地だ。何が力役だ。馬鹿にしくさって。

りん とうちやん。

とにかく、すぐにでも寄り合いを持つべ。

父 ああ、それがええ。このままでは疎水同様おらたちも干上がってしまうわ。

移住人たち、去る。父も行く。

ト喜作（青年）が入れ替わるようにしてやって来る。坊主頭に小ざっぱりとした服装（シャツとズボン）を

している。

喜作 りんちゃん。

タケ 喜作あんちゃん。

りん 珍しい。洋服だべ。どうしたんだ？

喜作 ん。お別れ言いに来たんだ。

りん お別れ？

喜作 (敬礼——の真似事をして) 兵隊になるんだ。

りん え——！

タケ 喜作あんちゃん、格好ええ。

喜作 茂吉はくじのがれだ。

りん 喜作さん、あんたまさか——。茂吉のためにくじを—

喜作 (笑って) くじはくじだ。そんなことできるわけがね

え。

でも、あんたの家は地主様でねえか。

関係ねえべ、そんなこと。

……

喜作 あした、入隊だ。

りん あした——

喜作 うん、あしただ。

(喜作の顔をじつと見た後、深々と頭を下げる)

——ん、じゃ、おらこれで。またな、タケ。

うん、さよなら。

喜作、去る。

トうめ(娘)がいつの間にか現れている。

兵隊さんは二年で帰ってくるべ。

うめちゃん。

……

あれからどうだ、おばちゃん？

良くなったり、悪くなったりだ、天気みてえに。ひで

え時はおらと借金取りの区別がつかねえんだ。

……

あのな、おらな……

何だべ？

……

うめちゃん。

やっぱ何でもねえ。

りん 気になるでねえか。

うめ これ。(トお手玉を出す)

りん 何？

うめ あげる。

りん でも、これ、うめちゃんが大事にしてるお手玉でねえか。

うめ ええから。

りん でも——

うめ もらってくれ。(りんの手に押しつける)

りん うめちゃん。

うめ それじゃな。(駆け去る)

りん うめちゃん。うめちゃん——。

タケ 泣いてたな、うめねえちゃん。何でだべ？

りん、手の中の粗末な手作りの赤いお手玉を見つめ立ち尽す。

ト乞食現れ、その様子を見ていた。

乞食 りん。おまえ何故ここを離れぬ。

りん おじさん。

タケ どうして那須野から逃げ出さないんだ。結局(土を捨て——)田にも畑にもならなかった。

りん そんなことねえ！

乞食 おじさん、それ、匂ってみろ。

りん 何？

乞食 いいから、匂ってみろ。

りん (手の中の土を匂う)

乞食 匂いするべ。

りん うむ。

乞食 おらたちがここに来た時とは、ちがう匂いだ。

りん ——！

乞食 な。

りん りん。

乞食 だからおら、ここ離れねえ。

(再び匂って)これはりん、おめえたちの匂い——。

暗転。

前場に続く。

りんの家。移住人たちが集まっている。家の外には乞食衛門の姿もある。皆一様に押し黙っている。とトメの腹が鳴る。

トメ　とうちゃん、腹へった。

……

トメ　腹の虫がでんぐり返しうつつとるぞ。

父　我慢しろ。あしたは何とかする。

祖母　難渋するだんべ……

女う　おらな、聞いたんだけど、また赤ちゃんが死んだま

まで生まれたんだとよ。

女い　ああ、聞いた、聞いた。

女い　どこだべ？

女い　ほら、例の……

女い　ああ。

女う　かあちゃんが食う物食つとらんのだもの。

女い　弔いだってあげてやれねえべ。和尚さん呼んだってお布施が出せねえ。

祖母　難渋するだんべ。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……

トメ　（お経のように）ああ、饅頭食いてえ、饅頭食いてえ……

父　またおめえは！

女あ　まあ、まあ！

女え　こうなったらいつそ越後に帰るべか。

女い　どの面下げて帰るってんだべ。

女う　そうだんべ。国も大世帯で厳しい暮らししとる。今さら帰ったって……

女え　じゃ、このまま皆で飢死にするだんべか。はあ？

ト移住人お、駆けてくる。

お　おうい、大事だ、大事だんべ！

お　どうした？

お　国吉さがいねえんだ！

お　何だって？

お　呼びに行ったんだけど、家さもぬけの殻なんだ。

お　うめちゃんところがか、おじさん？

お　ああ。こりや夜逃げだなきつと、間違いねえ。

お　りん

一同

夜逃げ!

りん

(お手玉を握りしめ) うめちゃん、うめちゃん――。

う

おい、どうするべ?

え

皆で手分けして探すか。

い

おう。

一同、バタバタと立ち上がるが――

祖母

やめろ。止せ。そつとしとけ。

女

ばあちゃん?

祖母

探してどうなるべ。こん中で貸してやる銭持つてる者が一人でもおるってんなら話は別だがよ。

女

そりゃあ、そうだけんど……。

間。――父、鍬を手にする。

父

これしかねえ!

い

何だべ?

父

(鍬示して) これしかねえだんべ!

う

おい?

父

打ち壊しだ!

一同

打ち壊し――!

父

開墾社の蔵には種だって肥やしだってあるだんべ。い

茂吉

んや、食う物も銭も困らねえぐれえあるに違えねえ。おじさん! そんなことしてどうなるべ?

い

またおめえ頭に血が上ってるんだ!

う

やめとけ。おらたちにそんなことできるわけがねえ!

父

うるせえ!

茂吉

おら、思うんだ。皆で矢板社長に助けを求めちゃどう

かって。開墾社にとって移住人は子ども同然だべ。子どもの飢えてるのを放っておく親はねえだんべ。

そんな悠長なことじゃ種撒く時期終っちゃまうべ。

打ち壊しなんてしてただで済むと思ってるのか。親類

縁者皆捕まってコレ(首切り)だんべや。

父

ただで済むも済まねえもこのままじゃ同じことだんべ。

おらたち結局騙され通しだったんだ。ここに来りや土地

地がもらえらるとうまいこと言って、力役だ何だとおら

たちを牛や馬のように働かせて。土地もようやく耕し

たら、今度は役納められねえようなら返地しろだ。疏

水にしても田つくるんだとおらたち喜ばせて、皆農場

茂吉

や地主の田んぼつくるためのもんでねえか。おらたちをこの那須野が原の肥やしにしようとしてるんだんべ。そんなことはねえ。おらたちがいたから那須野はようやくとこんだけになったんだ。疏水は引けたし、石ばかりの土地が畑になったんだべ。
うるせえ！ ようなつたといつて何で子どもに辛え目見せなくちやなんねえんだ。おい！ 誰かおらについて来る者はねえのか、ええ！ おら、一人でもやつてやる、この鍬でな！

父

一同、口々に、

い

よし！

う

おう！

え

やめろ、やめろ！

女

馬鹿なこと！

女

あんたら何考えてんだ！

お

女は黙つてろ！

り

とうちちゃん！ やめてくれ！ やめてくれ！

稲光。

り

とうちちゃん！

雷鳴。雨が降ってくる。

ト母の歌声が聞こえる。母（亡霊）は鍬を手に土地を耕している。

母（亡霊）

水なし水のこの土地に

汗と涙がしみてきて ホレ

種さ蒔いては 日が暮れる

り

かあちゃん！

母（亡霊）

りん、どうした。何メソメソしてる。もう泣かねえつて約束したのはどこの誰だべ、一生泣かねえとこの那須野の大地によ。

り

かあちゃん！

母（亡霊）

タケ、今にここを田んぼにしてくれるんでねえのか。

タケ

百姓は身体動かすもんだ。さあ、手伝え！

タケ

かあちゃん！（外へ飛び出して行く）

トメ

かあちゃん！（タケに続く）

りん
とうちゃん、それ貸してくれ。(父の鍬を取って、外に出る)

母、りん、タケ、トメ、歌いながら土を耕し始める。

茂吉
りんちゃん。

父
やめろ。無駄だんべ。気でも違ったのか。こら、りん、鍬返せ。

りん
(鍬を渡さず)今のおらにはこれしかできねえ。これしかできねえんだ。

タケ
とうちゃん、おらここを田んぼにする。田んぼにするってかあちゃんと約束したんだ。

父
何馬鹿言ってる。りん、ほら返せ。(鍬を取る)

りん
とうちゃんには見えねえのか、かあちゃんの姿が——(りんの言葉は聞こえず)さあ、みんな、行くのか、行かねえのか。

茂吉
おじさん!

父
もうえええ! おら一人でもやってやるんだ。命なんか惜しくねえ!

母(亡霊)
とうちゃん、鍬は置いてけ!

父
(はっとして)かあちゃん……!

母はりんの後ろに重なるようにして立っている。

父
何だ、りんか、生意気な……(ト行きかけるが)

母(亡霊)
鍬は打ち壊しの道具じゃねえ!

父、立ち止まり振り返る。

母(亡霊)、りんの後ろからりんの口を借りるかのよう
にしゃべる。(またはりんがしゃべる)

母(亡霊)

この鍬は那須野の大地耕したおらたちの血と汗のしみ込んだ大事な鍬だ。打ち壊しの道具なんかじゃねえ。あんた、鍬振るってできた手のタコをりんたちに自慢しとったじゃないか。あんたの手はこの土地と闘ってきた、この土地のことよう知つとる立派な手だ。今のが腹立って怒るだんべ。な、もう一度がんばってみるべ。この土地と闘ってみるだんべ。な、もう一度、もう一度よ。

父　　みつ……！

父、母（亡霊）の姿をはつきりと見る。

茂吉　おじさん！　な、早まんねえで、何とか矢板様に頼んでみるべ。

りん　とうちゃん！

タケ・トメ　とうちゃん！

父　　……（鍼見て）おら、どうかしとった。相変わらずの馬鹿者だ。

りん　とうちゃん。

父　　——でも、頼むったって、どうやって？

祖母　そうだ、それまた難渋するだんべ。

茂吉　それだべ。そのばあちゃんの「難渋するだんべ」ってことを伝えればええんだ。

祖母　それでええのか。

茂吉　ええよ。おらたちの今の有様を心込めて書けば。それでそれを皆で開墾社に持っていくんだ。

う　　ああ、そうするべ。

女う　そうするだんべ。

え　　でも、それ誰が書くんだ？

い　　茂吉、おめえ書けるか。

茂吉　おらは、難しい字は手習いねえと……。

う　　何だおめえ、偉そうなこと言って。

喜衛門　わしが書こう。

父　　え？

りん　おじさん。

喜衛門　（少し恥ずかしく決まりが悪い）わしが書こうと言うとるんだ。

い　　おめえ書けるのか。

喜衛門　昔はそれが務めだった。もっとも、百姓どもの言い分を取り締まる方だったが。書き方一つで命を落とすこともある。

父　　（皆に）頼んでみるべ。

一同　おお。（うなづく）

喜衛門　何か書くものはないか。

りん　ここにある。この土に書けばええ。

う　　おらが和尚さんに紙と筆もらってくるだ。（走って去る）

喜衛門　よし。さあ。（りんの父を促す）

父 おお、そしたらな……おらたち移住人は……

喜衛門 (書く) 私ども移住人は……

父 去年の大風でひんでえ被害受けて……

喜衛門 (書く) 去年の暴風雨により甚大な被害を被り……

父 難渋してるだんべ。

喜衛門 (書く) 難渋いたしおり候。——続けて。

父 ……この春は、種蒔く時期だつちゅうのに肥やしも種

も手持ちがねえ。おまけに食う物さえねえ。一家あげ

て路頭に迷うような……

和尚の声 ほうい、皆の衆!

茂吉 和尚様だ。

ト和尚が移住人うと共に駆けてくる。

和尚 話は聞いた。これはおまえたちだけではない、那須野の者皆の問題だ。ひとりでも多くの者に声をかけて、惣をつくって話に行くがええ。わしも陰ながら力になる。

い 和尚様がついててくれれば百人力だ。

一同 そうだ、そうだ。

和尚 (喜衛門に) どうだ、これを機会にそなたもここを終の住処と決めて、土にまみれて生きてみんかの。

喜衛門 ——!

りん おじさん。おらがアラクオコシ教えてやつから。

喜衛門 (ぐっと涙を堪える)

父 (喜衛門の肩を叩く)

和尚 おう、茂吉。おまえに大事な話があつてやつて来たんだつたわ。宇都宮へ出て農業を学んでこい。寺小屋式の小さな学校だが、そこなら働きながら学ぶこともできる。先生も熱心なお方じゃ。話つけてきたから明日からでも行ける。

茂吉 和尚様。

りん よかったな。

茂吉 (りに) おら、いっぺえ学んできつとこの那須野に帰ってくる。

い 当たり前だ。那須野のみんなのために行くんだから。

一同 (笑う)

喜衛門 さあ、続きやるだんべ。(ト訛っている)

父 やるべ、やるべ。

皆、「難洪御願書」作りに熱中する。
その途中、りん一人離れ――

りん かあちゃん。

母（亡霊） 何だ、りん？

りん おらな、時々越後にいた頃を思い出すことがあるんだ。
越後はここと違って水があふれてて川のせせらぎがや
山ん中駆け落ちて行くべ。でもな……

母（亡霊） ん？

りん

……この頃その水のせせらぎが聞こえなくなったんだ。
聞こえてくるのはこの広い那須野を渡る空つ風と、疏
水流れる水の音なんだ。おらのふるさとはいつの間
にか越後じゃなくて、この那須野になってたんだべ。だ
からおら、ここ逃げ出したいなんて思わねえし、ここ
に住んでることが、誰よりも好きだ。

母（亡霊） ん、耳澄ませてみる。

りん え？（耳に手を当て）あ――！ かあちゃん！

母（亡霊）（微笑みながら消えていく）

りん ……かあちゃん。

タケ、トメ、来る。

タケ・トメ ねえちゃん、何してるべ？

りん ほれ。（耳に手を当てる）

タケ・トメ （姉を真似して耳に手を当て――）

りん な。

タケ・トメ あ――、水が流れてる、疏水に水が――。

風がりんたちの頬をなでるように吹き過ぎていく。
父や茂吉や喜衛門や他の移住人たちもりんたちのそば
に集まってくる。そして皆耳を澄ませる。
やがて盆踊りのお囃子の音が静かに聞こえてくる。

エピソード

語り

（登場――帳面を開いて）那須開墾社の農業日誌には
こう記してある。

「明治二三年五月十四日 各区窮民ヨリ惣ヲ以テ播種
中救助ヲ願出ル」

「同五月十五日 各区窮民へ播種中老人ニ付金五拾銭

ヲ無利子ヲ以テ貸与ス」

りんたち移住人が土地を得るのは明治二七年の那須開墾社の解散を待たなければならぬ。しかし、実際に土地を手にするのできた者はわずかであった。

同じ年、日清戦争が始まり、日本は長い戦争の時代に入っていく。

那須疏水の水利権は明治三三年、移住人にも渡されるが、しかしこれとても実質的な水利権はずっと後の時代になって得られるのであった。

舞台転換終わり、プロローグと同じ盆踊りの場になっている。

りんと喜衛門。

りん婆
喜衛門
……そんで、おらたちがようやつと息をつけたのはお蚕さんやり始めてからだだった。

りん婆
喜衛門
今じゃあんたもこの人間だ。

りん婆
喜衛門
おらは訛ってねえだんべ。(笑う)

りん

おら、田つくる夢あきらめたわけじゃねえ。おらの目の黒いうちは無理でも、おらの子か、その孫たちがいつか——

喜衛門
りん婆
——いつかこの那須野が原を水と緑の大地にしてくれる——

りん婆
喜衛門
それが五十年先か、百年先かわかんねえけど。(にっこり微笑んで)それぐらい望み持ってもよかだんべ。

喜衛門
変わつたらんなあ、変わつたらん。(笑って、去る)

りん、そつと涙を拭く。

ト踊りの輪の中から少女たちが駆けてくる。

女の子
泣いてるべ。

りん婆
え……?

娘
泣いてるだんべ。

りん婆
何だ?

女の子
もう泣かねえと約束したのに……、よく泣いたべ。

泣いて泣いて、疏水の水になったんだべなあ。(けらけら笑う)

りん婆
女の子
娘
りん婆
女の子
娘
りん婆

誰だ、おめえたち？
わからねえのか。
わからねえのか。
わからねえ。
おらはおめえだ。
おめえはおらだ。
おらがおめえで、おめえがおらか。あ——！ わかつたべ。おめえたち、もしかして——

トリん、手で狐の形をつくってみせる。
少女たち、顔を見合わせる。トけろけると笑い出し、踊りの輪の中に紛れ込み消えてしまう。
りん、一頻り笑う。そして誰より元気に踊り出す。
お囃子と入れ替わるようにテーマ音楽高鳴って——幕。

連絡先 広島友好

住所〒755-0039 山口県宇部市東梶返3丁目18-7-1

又は〒754-1311 山口県宇部市大字小野10120番地渡邊方

電話番号 0836-224065

又は 0836-642289 (渡邊)

メールアドレス hiroshimatomooshi@yahoo.co.jp